令和６年度

新時代に対応した高等学校改革推進事業

（普通科改革支援事業）

研究実施報告書

第３年次

岩手県立大槌高等学校

巻頭言

岩手県立大槌高等学校　校長　志田　敬

大槌町と連携・協働した高校魅力化事業を開始して６年、文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」に取り組み３年目を迎えました。この間、NPO 法人カタリバをはじめ、地域の皆様、関係機関の皆様のご支援・ご協力により、多くの成果を上げることができましたことに、心より感謝申し上げます。

本校が地域との協働による教育改革に取り組む背景には、震災による人口減少、少子化、高校存続の危機といった課題がありました。こうした課題を乗り越え、生徒一人ひとりが地域社会の担い手として成長することを目指し、地域と連携した探究活動やカリキュラムの充実に努めてまいりました。生徒たちは、地域課題を自らの学びのテーマとし、探究を深める中で主体性や協働力を養い、大槌町の未来を考え、行動できる力を身につけています。

令和６年度は、これまでの取組をさらに発展させるべく、それまでの普通科を改め新学科「地域探究科」を設置しました。地域探究科では地域と連携した学びをさらに充実させるため、カリキュラムワーキンググループ（WG）において、生徒の意見を積極的に取り入れ、より柔軟で選択肢の広い学びの環境を整備してきました。具体的には、就職希望者を中心に実施するインターンシップを単位化するデュアルシステムの導入、ICT を活用した個別最適な学びの推進など、生徒の可能性を最大限に引き出す取り組みを進めています。

また、広報 WG では、地域の皆様に本校の取組を広く知っていただくために、町内の商業施設や文化交流施設での展示や発表の機会を増やし、生徒の学びの成果を発信しています。これにより、地域の方々との接点をさらに増やすことで、学校と地域の連携強化を進めています。広報活動の推進は、本校の教育理念をより多くの人々に伝え、地域社会とのつながりをより深める大きな一歩となります。

さらに、DXWG では、遠隔授業やオンライン講座の活用を推進し、県内外の教育機関との連携を充実することで、生徒に多様な学びの機会を提供しています。普段の授業における生徒の ICT 活用の促進、授業改善のためのアプリ導入など、より効率的で意欲的な学びの実現を目指しています。ICT の活用により、地理的な制約を超えた学びの場が広がり、生徒の視野を広げる重要な要素となっています。

また、これらの取組を支えるために、教職員の研修の充実も図っています。最新の教育手法を学び、生徒の多様なニーズに対応できる教員の育成に努めることで、より質の高い教育を提供できる体制を整えています。生徒の成長を支えるためには、教職員自身が学び続けることが不可欠であり、その努力が学校全体の成長につながると確信しています。

こうした改革の実現には、教職員の熱意と努力、そして地域の皆様のご協力が不可欠です。本校では、これからも生徒の未来を第一に考え、地域とともに歩む学校づくりを進めてまいります。

最後になりますが、本年度の活動にご協力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げ、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

目　　次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１
目次・・　２

Ⅰ　研究開発実施報告（概要）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３
　令和６年度成果概要図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４
　事業完了報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

Ⅱ　研究開発の内容（詳細）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２７
１　会議関係　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２８
（１）魅力化構想会議・コンソーシアム会議　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２８
（２）運営指導委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３２
（３）普通科改革研究協議会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３５

２　ワーキンググループにおける検討について・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４１
（１）カリキュラムＷＧにおける検討について・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４１
（２）ＤＸ等教育方法検討ＷＧにおける検討について・・・・・・・・・・・・・・・　４５
（３）周知・広報ＷＧにおける検討について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４６

３　学校設定教科「地域みらい学」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５０
（１）総合的な探究の時間　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５０
　ア　１年生の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５１
　イ　２年生の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６１
　ウ　３年生の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７２
（２）学校設定科目　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７９
　ア　ひょっこり表現島（国語）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７９
　イ　まちづくり探究（地歴公民）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８０
　ウ　くらしｍａｔｈ（数学）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８２
　エ　おおつちラボ（理科）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８３
　オ　Ｅパスポート（英語）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８６

４　目標の進捗状況、成果、評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８８
（１）資質・能力調査について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８８
（２）ルーブリックを活用した評価について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８９

Ⅲ　参考資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９１
　◇目標設定シート　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９２
　◇学校評価システムによる評価結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９３
　◇令和７年度入学生の在学期間の教育課程　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９５

Ⅰ　研究開発実施報告（概要）

【岩手県立大槌高等学校】地域社会学科（学科名：地域探究科）（令和６年度設置）

事業構想	「大海を航る大槌（ハンマー）を持とう」を実現し、 「学ぶことが楽しい」「もっと学びたい」と思う 魅力的な学びの環境を地域と共に創る
事業目的	・多様な学びを保障する個別最適化されたカリキュラムの実現 ・復興を担う人材の育成、社会教育の拠点としての高校の実現
特色・魅力ある教育の概要	①生徒自らが選択・調整できる学び ②地域社会を舞台に学ぶ実践的な問いからはじまる ③放課後等の学校外に広がる探究的な学び ④個別最適なリメディアル教育の実践

関係機関との連携・協働体制の構築方法

令和６年度の目標

①開設された新学科における教育活動を実践しながら充実を図る

ア）デュアルシステム、社会教育の単位認定、等を中心とするカキュラム開発

イ）個別最適な学びについての検討

ウ）中学生とその保護者・地域に向けて新学科の効果的な周知

②地域を題材とした探究の実践と充実

③先進校事例の収集と情報交換の実施

④コーディネーターの有機的活用

取組状況

①全教員からなる３つのワーキンググループ(WG)設置

②地域を題材とした探究の実践と充実
・地域探究の取組を町議会、地域公民館で発表し、地域の声を聞く機会を得た。

③先進校事例の収集と情報交換の実施
・全国の13校と交流を深めた。

④コーディネーターの有機的活用
・探究活動の企画、推進役として、地域協働を推し進めた。

成果と課題

①全教員からなる３つのワーキンググループ(WG)設置

成果：新学科設置を受けて全教員が事業に主体的に関わる体制作りの構築（全体）
　カリキュラム実施・推進に向けた具体的な計画と検討（教育課程の修正、デュアルシステム、社会教育の単位認定）について検討（カリキュラム）
　生徒・保護者の声を受けた個別最適な学び（英語・数学）の実施とICT教材を取り入れた授業開発（ＤＸ）
　生徒の活動や関係者の想いが伝わるようなnoteにおける発信に注力し、様々な活動の周知を図った（周知・広報）

課題：現在の活動を円滑に維持・発展できる体制作り（全体）
　デュアルシステム、社会教育の単位認定に向けた関係機関との調整（カリキュラム）
　個別最適な学び（英語・数学）のICT化に向けた授業作り（ＤＸ）
　地域の小中学校生や保護者に本校への理解をいかに深めてもらうか検討（周知・広報）

②地域を題材とした探究の実践と充実

成果：生徒自ら地域に出て、地域の人々の前で発表し、協働することで、自らの人生を切り拓き、挑戦しようとする生徒が増加

課題：地域との協働が進むほど、特定の生徒・グループに負荷がかかってしまう

③先進校事例の収集と情報交換の実施

成果：多くの学校と探究活動、地域との連携、教育課程、職業体験、海外留学について意見交換を行い、本校の教育活動にいかすことができた

課題：より多くの教職員が他校交流に参加できる体制の構築

④コーディネーターの有機的活用

成果：探究活動のさらなる充実を図り、地域と学校を繋ぐ役割を担った

課題：事業終了後も継続配置できる予算確保とコーディネータースキルの教員への伝達

⑤高校魅力化評価システムの調査結果

成果：ウェルビーイングに関する項目をはじめとして全体的に入学時からの数値が着実に上昇しており、魅力的な学びの環境を地域と共に創るという事業構想の具現化が確認できた

課題：現体制の維持、発展ができる体制の整備が必要であり、継続して研修の機会を持つ

（別紙　イ）

事業結果説明書

1　事業の実績

事業の実施日程

事業項目	実施日程（令和６年４月１日～令和７年３月 31 日）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施												
カリキュラム開発会議	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
DX 等検討会議	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
周知・広報検討会議	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
フィールドワーク				●			●	●	●			
教員研修（個別最適な学び）									●		●	
関係機関との連携協力体制の構築・維持												
運営指導委員会				●							●	
コンソーシアム（魅力化構想）会議				●				●			●	
大槌発未来塾		●										
コーディネーター												
コーディネーター（菅野祐太・小野寺綾氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コーディネーター（星野七海・星野眞理氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
新学科設置に向けた説明会等の実施												
高校説明会（中学生・保護者）			●	●	●	●						
オープンスクール				●	●	●						
成果発表・成果普及												
探究発表会								●			●	
マイプロジェクトアワード											●	
SIMulation おおつち発表会							●		●		●	
これからの大槌高校を考える会								●				
成果検証												
高校魅力化評価システム				●	●				●	●		
アンケート調査		●								●		

２　事業の実績の説明

（１）カリキュラムの検討内容

ア　新学科開設に向けて特色・魅力ある先進的なカリキュラム開発

新カリキュラム開発はカリキュラム WG を中心に進めており、以下に検討内容を記載する。

（ア）探究的に学ぶ科目の充実

これまで本校で研究開発を進めてきた総合的な探究の時間「三陸みらい探究」、学校設定教科の「地域みらい学」の深化に加えて新規の探究科目の設定及び既存教科においても探究的な学びを深めていく。

（イ）科目選択の自由度の向上

大槌高校として学んでほしい必履修科目を学んだ上で、進学・就職に関係なく生徒自ら学びに合わせて選択できる学校設定科目を準備する。

進学希望者は、より大学進学に特化したカリキュラム選択が可能となり、また学習に不安がある生徒は、数学・英語で中学校の復習から始まる復習科目を選択できる。また、学校設定科目の選択の幅が広がった他、進学希望者が３年次まで芸術を選択できるようにする。

（ウ）復習科目の充実（リメディアル）

数学・英語については、リメディアル科目を配置し、必要に応じて自由に選択が可能となった。１年次は中学校の復習から開始し、学びの再体験を図り、２年次から３年次については、自分の学びの目標や進度に合わせて ICT も導入しつつ、学びを進める。基礎学力の定着もさることながら、自己調整力を高め、自ら学ぶ姿勢の育成を図る個別最適学習の実現を目指す。

（エ）キャリア教育の充実

２年次にデュアルシステムを導入し、第１次から第３次産業までを体験するインターンシップを年４回実施することとした。また、地域と協働しての商品開発や販売、就職実践講座、年間の活動報告を企業関係者に対して行う計画について具体的な話し合いを進めた。今年度は兵庫県及び大阪府の先行事例を視察し、具体的な年間計画を立案すると同時に、大槌町産業振興課を窓口として受け入れ先となる町内の企業との連携の在り方と実施の細目について継続して検討している。

（オ）社会教育の単位認定

震災後から活動している「復興研究会」での活動、東京大学大気海洋研究所と連携した「はま研究会」での活動、地域行事のボランティア活動への参加等、生徒の社会教育での学びも高校生活における重要な学びとして単位化することについて、令和６年度にカリキュラムＷＧで具体的な方策等を継続して検討中である。このなかで、生徒の在学中の活動が職員間で共有されず、また生徒自身も自らの多様な活動を有機的に結び付けられていないことが課題として挙げられた。社会教育を単位化することと同時に、諸活動をポートフォリオ化して整理する仕組みの構築について検討が進んでいる。

（カ）授業のオンライン履修の一部認可

教室に入ることができない生徒の学びの保障や本校で開講できない科目について、外部の授業をオンライン受講することを想定し、限定的にオンラインでの履修を認めることが検討されたが、単位認定の方法や出欠の計算方法等課題が指摘され、継続的な議論が必要である。

（キ）セルフラーニング

３年次にセルフラーニングタイムを設け、学びや活動の時間を自己プロデュースできるようになることを目指し導入を進めてきた。令和７年度は導入が見送られたが、カリキュラムの全体像をブラッシュアップする中で、その必要性と在り方について継続して検討を進めていく必要がある。

イ　新カリキュラム開発の課題

（ア）科目選択の自由度が高まれば教員のコマ数が増加するため、小規模校の人員でどうカリキュラム編成するかが課題となり、教員の加配が望まれる。また、カリキュラムが複雑になっていくなかで、出張等で教員が不在の際、時間割変更が難しくなっていくことにともない、自習課題の在り方について議論が必要である。

（イ）デュアルシステムについて、受け入れ先のさらなる開拓が必要であると同時に、学校側の意図を受け入れ先にご理解いただくことが非常に重要である。そのためにも、まずは教員側の目線合わせが重要となる。

（ウ）セルフラーニングタイムを導入する場合、選択した生徒が自走できるようにするサポート体制について検討が必要である。

（エ）オンライン履修を認めた際、授業に参加しない生徒増も考慮して慎重な検討が必要である。

ウ　総合的な探究の時間及び学校設定科目について

（ア）　地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

令和元年度より「総合的な探究の時間」の先取りで学校設定科目「三陸みらい探究（５単位）」を策定した。なお、令和４年度入学生からは「総合的な探究の時間（５単位）」を設置している。また、令和３年度からは５教科においても探究的な学びを教科横断的に実践する学校設定科目「ひょっこり表現島」「まちづくり探究」「くらしｍａｔｈ」「おおつちラボ」「Ｅパスポート」を設置した。探究的な学びを実践する５つの学校設定科目は、各科目の特性を活かしながら地域課題を考え、解決方法を模索・表現することを目的としている。なお、本校ではこれら５教科の学校設定科目を総称して学校設定教科「地域みらい学」と呼んでおり、新学科における学校設定科目の中心となっている。

（イ）総合的な探究の時間、学校設定科目のカリキュラム開発体制について

総合的な探究の時間については、地域協働学習実施支援員が中心となり週１回学年ごとに探究活動の進捗を確認、検討している。この検討には校内に配置されているコラボスクール（公営塾）のスタッフも参加することもある。

「地域みらい学」及び英語と数学の個別最適授業等の学校設定科目については、教科内で密に話し合いをもち、内容および展開について、意見を出し合いながら実践と検討を繰り返している。他教科の授業も含めて授業見学を行っているほか、教員研修会を開催し指導内容や指導方法について情報共有している。

（ウ）総合的な探究の時間、学校設定科目実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
カリキュラム検討	通年実施											
総合的な探究の時間（１年生）	#1	#2 自分プレゼン							#3 SIMulation おおつち		#4	
総合的な探究の時間（２年生）			#5		#6 マイプロジェク			#4	#5		#5	
総合的な探究の時間（３年生）		#7 マイプロジェクト	#8					マイプロジェクト				

＃１：オリエンテーション　＃２：大槌発未来塾！　＃３：ラーニングジャーニー

＃４：探究発表会　＃５：学校横断型探究プロジェクト

＃６：マイプロジェクトフィールドワーク　＃7：職業インタビュー

＃8：アカデミックオンラインディスカッション

（エ）総合的な探究の時間、学校設定科目の内容について

①　総合的な探究の時間による資質・能力の育成

［１年生の活動　２単位］

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
５月	**大槌発未来塾！** **町内外で働く大人 10 名が取り組むマイプロジェクトを聞き、今後の進路や、地域社会との関わり方について考えた。**	**［生き方を考える］** 他者の生き方に触れることを通して、自らの生き方について考える。
５月～７月	**自分紹介プレゼンテーション** 探究を進めていくために必要な課題設定力を育むために、自己発見・自己理解を通して自分なりの視点を獲得した。自分を紹介するプレゼンテーションを作成し、町内の中学生を校内に招いて発表した。	**［表現し内省する］** 相手に伝わるよう表現することを通して、自己を内省する。
８月～２月	**SIMulation おおつち** 理想とする町の姿を考え、町内にある地域課題の解決策を構想した。生徒を課題意識ごとにグループ分けし、町の総合計画に掲げられた分野に沿って議論した。その後ヒアリング等の調査活動をへてテーマを設定し、10 月に大槌町会議員や役場の担当職員に発表し探究の方向性についてアドバイスをいただいた。その後 11 月には解決策の先進事例を知ることを目的に、町外の自治体や民間団体を訪問しフィールドワーク調査を実施した。12 月に行われた中間発表会での大槌町町役場職員から助言を受けてその後の方針の確認を行った。これらの成果を踏まえ、地域課題の解決アイディアを議論し、２月に、大槌町議会の議場で議員及び役場職員に地域課題の解決策を発表するとともに、地域住民に対して発表した。	**［地域課題を知り、解決のための方策を考える］** 町内の地域課題を題材に、課題解決のための方策を考え、提案を行う。

［２年生の活動　２単位］

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
５月	**大槌発未来塾！** 町内外で働く大人 10 名が取り組むマイプロジェクトを聞き、今後のプロジェクトの発展や卒業後の進路選択に役立てる機会とした。	**［地域と探究を接続する］** 地域課題解決のモデルケースに触れ、マイプロジェクトに活かす。
５月～９月	**マイプロジェクト①テーマ設定** 短期間でのプロジェクト活動や大人への相談活動を通して、個々人の興味関心あるテーマを発見し、探究したい問いを設定した。 **・マイプロジェクト・フィールドワーク** 自分のテーマと似た活動に取り組む地域の方を訪ねて、体験活動やアドバイスをもらうフィールドワークを実施した。	**［マイプロジェクト探究に向けた課題を設定する］** 個人の興味関心あるテーマを発見し、探究したい問いを設定する。
９月～２月	**マイプロジェクト②課題解決アクション実践** 課題解決に向けたアクションを行いながら設定した問いを探究す	**［アクションを通して課題解決を学ぶ］**

	ることで、課題解決を行う資質・能力を総合的に育成した。定期的に成果報告の機会を設け、考えを相手に伝える力を高めた。 **・ゼミ活動（９月～１月）** 課題設定から解決策を実施するまでの流れを繰り返した。テーマに応じてゼミに分かれ、教員が分担して生徒の活動を支援した。 **・中間発表会（11 月）** 町内各地区の公民館において、半年間の活動の成果をプレゼンテーションにまとめ、地域住民の前で発表した。 **・学校横断型探究プロジェクト（６月・10 月・１月）** 北海道・山形県・栃木県・静岡県・鳥取県・長崎県の小規模校とオンライン接続し、互いの活動について発表しフィードバックする交流活動を定期的に実施した。 **・最終発表会（２月）** １年間の活動の成果をプレゼンテーションにまとめ、町民の前で発表した。	課題解決を行う資質・能力を総合的に育成する。

［３年生の活動　２単位］

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
４月～７月	**<u>アカデミック・オンラインディスカッション（大学・短大進学、公務員希望生徒）</u>** ２年生のマイプロジェクト探究で取り組んだテーマをさらに深めることを目的に、論文等を読みながら新たな問いを設定した。問いを深めるために議論したい専門家に依頼し、４～５人グループでオンラインディスカッションを実施した。 **<u>職業インタビュー（専門学校進学、就職希望生徒）</u>** 就きたい職業に必要な能力を理解することを目的に、生徒が関心ある職業人にインタビューを実施した。自分の現状と就きたい職業に必要な能力とのギャップや課題を把握し、今後身に付けたい力について構想した。	**［マイプロジェクトを進路に繋げる］** マイプロジェクトでの探究活動を軸に卒業後の進路を考え、必要な力を育成する。
11 月～２月	**<u>18 年間で身に付けた“大槌（ハンマー）”と知見</u>** オープンダイアログや人生グラフの作成を通して、各生徒が 18 年間の人生で身に付けた“大槌（ハンマー）”＝強み　を自分の言葉で表現した。また、身に付けた“大槌”や知見をプレゼンテーションにまとめ、探究活動等で関わった地域の方をはじめ、これまでお世話になったになった方々に向けて発表した。	**［探究での学びを総括する］** これまでの探究活動や学びを整理し、自分なりの言葉で表現する力を身に付ける。

※課題や改善点について

今年度は、１年生の活動において、SIMulation おおつちの発表会を大槌町議会の議場を会場として実施した。また、２年生の活動において、中間発表会を町内の公民館を会場として実施した。その結果、例年より発表に対する意欲が生まれ、発表後に地域からいただく助言の量も増えた。今後も、日頃の活動だけでなく、発表会を地域に開くという取組は継続していきたい。

② 学校設定教科「地域みらい学」の実施

総合的な探究の時間の代替である「三陸みらい探究」を軸にして、５教科に探究的な学びを実践する科目を設定した。学校設定科目ではそれぞれの教科の特性を踏まえながら、必要に応じて科目を横断的に接続しながら地域課題探究に取り組む。

科目名 学年・単位数	今年度の取組	今後の取組
ひょっこり表現島 ２年生 ２単位	年間を通して「表現」を軸に授業を構成した。 【「話す・聞く」ことを中心とした表現】 「他己紹介」「ビブリオバトル」（前期中間）「寸劇」（後期中間）の活動を通し、「話す・聞く」ことを中心とした表現活動を行った。「ビブリオバトル」では、５分間、原稿を見ずに本の魅力を紹介しあう活動に取り組んだ。「寸劇」では、グループで「喜」を題とした３分間の劇を通して、特に身体による表現力やコミュニケーション能力などを高めた。 【「書く」ことを中心とした表現】 各活動後に「振り返りシート」に取り組み、生徒の取り組みを文章で表現させた。また、「文化祭のポスターを作る」（後期中間）、「川柳作成」（前期末）などといった活動から、限られた文字数や必要な情報を効果的に盛り込むことができるようになった。 【知識・技能領域】 表現力のベースとなる漢字力や語彙力育成を目的とした小テストを、期ごとに行った。自己調整力の向上をねらいとし、テスト範囲を生徒に提示し、項目ごとに小テストを受けさせ、合格したら次のステップに進ませる方法で小テストを行った。 【方言で表現】 後期末では、生徒一人ひとりが得意とする表現方法で「方言」に関する創作をメインとした活動を行った。テーマ設定、進め方などに関しては生徒にゆだね、担当教員が適宜伴走し創作物の完成を目指す。「大槌の方言でアフレコ」「全国の方言で『ありがとう』をプレゼンテーションにまとめる」「方言で神経衰弱」などを制作した。最終的には町内の小学生に対し「ミニ授業」という形で発表する。	「探究学習」という視点で考えると、調べ学習に終始してしまった点が否めなかった。町の人へのインタビュー活動など地域とのつながりを作り、生きた言語を探究させる仕掛けづくりを行っていく。
まちづくり探究	４月から６月は、「札幌と沖縄はどちらが住みやすいのか」というテーマでの話し合いや、「このまち一番選手権」と題して無作為に選ばれた「まち」の魅力	今後も、導入は身近な問いにしなが

３年生 ２単位	を調べてプレゼンテーションを行う活動を通して、魅力的な「まち」とは何かを考えた。６月から９月は、「SIM おおつち２」と題して、大槌町が担う政策の優先度を考え、将来の大槌町がどのような形になるとよいと思うかを話し合った。９月から 11 月は、「桃太郎電鉄　教育版」を用いて、ゲームを通して学べる「まち」の魅力や、ゲームを通して学ぶ意義を考えた。11 月から３月は「大槌の魅力が伝わるゲーム」の作成に挑戦した。東京（都会）と大槌を比較しながら大槌の魅力が伝わるよう、「レシピ」というゲームを土台にして生徒がゲーム構成を考えた。１月には大槌学園の中学生に作成したゲームをプレイしてもらう交流会を開催した。	らも、まちづくりだけでなく、選挙権や人権について考え、町政や復興に関わること、意思決定などについて考える機会を設けたい。
<u>くらし math</u> ３年生 ２単位	前期は、「日常生活の事象を数学化して解決する」ための演習として、客観的なデータや数値に基づいて判断をする場面（生活費、コマづくり等）や、最適解がみつからない問に対して複合的な視点で考える場面（求人票の比較，宝くじの分析等）を設定し、学習した。また、データを用いて探究するための基礎技能として、グラフの活用・アンケート調査・Excel の扱い方について学んだ。 後期は、文化祭の模擬店の売価と原価についての関係や、地元の名産品をデータ分析しレポートにまとめ、それらを材料とした料理についてグループごとに分量や材料費を計算し調理を行った。文化祭では、予想販売数から必要な食材の量を計算したり、予算内で食材や装飾品を準備するための計画をたて、模擬店の運営に役立てた。地元の名産品については、データの情報が限られているため、地域との関連が薄くなってしまったが、自分で調べたデータをグラフにして分析・考察することができた。	・日常的な事象を、論理的思考で課題解決するため、感覚的ではなく根拠を言語化できるように工夫したい。 ・地域との関連を強くするため、大槌町のデータの活用や地域の課題などを数学的に考えるコンテンツの開発を目指す。
<u>Ｅパスポート</u> ２年生 ２単位	前期で身に付ける資質・能力をジブンゴト・課題設定と置き、ネイティブスピーカーの故郷であるアメリカ・コネチカットに「留学をしてみる・現地での日本文化の紹介」などをテーマに、税関、ホテル・ホストファミリー、医療機関、買い物など様々な場面を設定して会話練習を行った。航空券サイトの見方・チケットの買い方、ドルから円（その逆も）への計算も英語で行った。生徒たちは自分の伝えたいことを英語にして、英語を母語にする人にもコミュニケーションを取ることができることを学んだ。後期は留学生が日本に来た設定で自分の学校の行事や町の紹介、修学旅行（京都・大阪）についてを英語で紹介する場面を設定したり、異文化理解をテーマにゲストを招いてお正月の過ごし方やおもしろい（めずらしい）行事について学んだりした。	・外国人に向けた大槌の紹介映像や HP の英語版製作に取り組みたい。また、より身近なテーマについて英語で表現する機会を設けたい。 ・コラボスクールとの協力を得ながら姉妹都市であるフォートブラッグとの連携を図りたい。
<u>おおつちラボ</u> ３年生 ３単位	日常生活の中での「便利/不便」に感じることや「不思議」なことから、テーマを設定し、仮説を立て、調べ学習によって検証する過程を学んだ。「海洋プラスチック」や「火力発電」などの科学的事実・現象に対し、賛成・反対の意見を示しながらグループで討論を行い、科学的知見を用いて賛否の折衷案を探る体	・大槌サーモンの取り組みを継続。 ・郷土財エリアを題材に、ビオトープづ

	験を行った。 　地域課題と SDGs に注目し、17 項目ある中で「海の豊かさ」「飢餓をゼロに」をテーマに大槌町の増養殖に関する取り組みについて現状把握を行った。町内のフィールドワーク（岩手大槌サーモン養殖視察）を通じて、取り組みの成果と課題について学んだ。また、SDGs の観点から大槌町の今後について考え、その内容をポスターとしてまとめ、科学的な視点が現代社会とも繋がることを学んだ。	くりに携わることで自然保全につながる授業を組みたい。 ・地域と関連した取り組みについて今後さらに検討したい。

※課題と今後について　上記学校設定科目は教科書がなく、授業者が年間を通して試行錯誤を繰り返しながら探究的な学びを軸においた指導計画を策定するため教員の負担感が大きい。そのため、教科担任でチームを組んでの指導・教材開発を継続し、定期的に全体での検討を行い、科目の目標を確認しながら、より深い探究活動が行える科目にブラッシュアップを図る必要がある。また、受講生徒の特性に応じた柔軟なカリキュラム策定が必要となる。

（オ）学校横断型探究プロジェクトについて

小規模高校は地域資源と接続しやすいというメリットがある反面、自分と同様な興味関心を持つ生徒や教員と出会うことが難しいというデメリットがある。オンラインを活用することで学校の域を越え、同じような探究テーマで活動する生徒や、そのテーマに専門性を持つ大人と交流することが可能となる。そこで今年度は、マイプロジェクトを行っている小規模校が各回３～５校集まり、探究交流授業を行った。生徒の探究活動のジャンルごとにグループを作り、グループごとに発表・質疑を行った。次年度についても、小規模校等の連携を継続していきたい。

	探究交流授業　連携校
第１回（６月）	北海道鹿追高等学校、山形県立新庄南高等学校 金山校 静岡県立川根高等学校、鳥取県立青谷高等学校
第２回（10月）	北海道鹿追高等学校、栃木県立足利特別支援学校 鳥取県立青谷高等学校、長崎県立猶興館高等学校
第３回（１月）	長崎県立猶興館高校、長崎県立宇久高校

（２）管理機関による事業の実施体制や管理方法

ア　管理機関による事業の実施体制や管理方法について

管理機関独自の予算措置を行うとともに、事業をきめ細かく実施できるように教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問して事業の進捗を確認し、必要に応じ指導助言を行う。

イ　管理機関における主体的な取組について

（ア）管理機関（コンソーシアムを含む）における主体的な取組について

本事業予算から地域協働学習実施支援員１名の配置を行う。

（イ）事業終了後の自走を見据えた取組について

本事業により開発した研究内容について、事業終了後も充実発展させていくとともに、管理機関により、所管する高等学校へ広く周知していく。また、学校設定教科及び学校設定科目の実施について、適切な教育課程となるよう指導助言を行う。

（３）高等学校における事業の実施体制や管理方法について

ア　事業の対象

学校名	岩手県立大槌高等学校	校長名	志田　敬
学科の種類	地域社会学科	新学科の名称	地域探究科
新学科の定員	80 名	設置年度	令和６年度

イ　事業の実施体制・管理方法

校長の下で、副校長と、全職員からなる３つのワーキンググループ（カリキュラム、DX 等教育方法検討、周知・広報）（以下 WG）が相互に連携し新学科の運営に当たった。各 WG で検討された内容は、随時職員会議で周知を図っている。また、検討の進捗状況に関しては、岩手県教育委員会、運営指導委員会、コンソーシアム（魅力化構想）会議にそれぞれ報告し、指導、助言をいただいている。

ウ　各 WG の取組

（ア）カリキュラム WG

カリキュラム策定及びデュアルシステムの在り方の検討が役割である。今年度は、令和７年度の教育課程について確認と修正を行ったほか、デュアルシステム、社会教育の単位認定についての検討を行った。令和７年度実施のデュアルシステムについては、７月に先進校視察（大阪府東大阪市、兵庫県神戸市）を行った。当初インターンシップの期間を延ばす形を検討したが、企業の受け入れ体制、地域との協働という観点から別案の検討に入った。インターンシップ期間を年４回設け、３回は第１次から第３次産業までの就業体験、残り１回は来年度希望する職種に関わる企業でのインターンシップとする方向で検討を進めた。

社会教育の単位認定については、認定のメリットとデメリットについて改めて議論がなされたが、生徒の活動がどの程度の時間になっているのか教職員が数量的に把握するようにすることと、生徒が自らの様々な活動を有機的に結び付けて統合し、次の学習段階へのステップとすることの有用性が議論された。様々な探究活動が進路希望と結び付けられるようにするために活動の記録（ポートフォリオ）の作成から始めることが必要と考え、その在り方や方法について今後とも継続して議論を進めていくこととなった。

（イ）DX 等教育方法検討 WG

今年度５月から、個別最適数学と英語の授業が１年生で開始された。より充実した授業を目指し、数学科と英語科間での互見授業を始め、他教科の先生にも参観してもらい、実態の把握や授業について様々な視点からご意見をいただいた。また、WG 内で具体的な授業展開や教材、評価方法を検討する中であがった様々な課題等について、検討・協議会を数回実施した。その結果を受けて、評価方法等に関するグループと動機付けに関するグループに分かれて検討している。

12 月には、本校運営指導委員会で岩手大学教育学部の久坂哲也氏（「メタ認知」や「動機づけ」などに関する領域が専門）を講師にお招きし、現状の個別最適数学と英語の授業を参観後、研究協議会にて助言・指導をいただいた。

今年度は、英語、数学ともに授業展開や指導方法について、「検討」と「実践」の同時進行で行われた。個別最適授業初年度ということもあり、ICT に頼らない授業を展開したが、

これにより授業者と学習者の良好な関係性が生まれ、生徒が主体的に学びに向かう姿勢を醸成することに成功した。一方で学習が進むにしたがって生徒ごとの進度の差が明確になり始め、教員の手が回らない時間が多くなり、時間をもてあます生徒も散見されるようになっている。今年度の実績を活かしつつ、ICT を導入した教育の展開を検討し、WG 内でデジタル教材の比較検討会及び業者を招いての説明会を数回実施した。

（ウ）周知・広報 WG

設置目的は、高校改革における情報を周知し、地域を協働するパートナーへと転化させることである。６月から９月にかけては、地域内の中学校の高校説明会に参加し、中学生及び保護者向けに新学科の説明を行った。その他、生徒の探究や行事、研究会の活動などの取組を note や「広報おおつち」を活用して情報発信を積極的に行った。特に note での発信については、校内の様々な職員が書き手となり、それぞれの見地から発信したことで、バラエティーに富んだ内容となった。

広報活動は複数チャンネルを使って行っており、特に note の閲覧件数は増加しているものの、中学生やその保護者、地域の方に「地域のことについて学ぶ学科」として誤解されている場面も多く、「地域とともに学ぶ」「地域を通して社会を学ぶ」という新学科のコンセプトが幅広く浸透しているとはまだ言えず、今後も効果的な周知の方法を検討していく必要がある。

令和６年度　ワーキンググループ(WG)所属一覧及び取組内容

◎WG長、〇副WG長、□事務局

全体統括		校長　志田　敬・副校長　伊藤　晃		R4（取組内容）	R5（取組内容）	R6（取組予定）
1	カリキュラムWG	◎松田明日香	〇八尾晃一	・他校の特色あるカリキュラムの事例検討 ・育てたい人物像を踏まえつつ新カリキュラム策定に向けての議論 ・生徒ワークショップ開催 （魅力的な学校･カリキュラムにするには） ・デュアルシステム先進校聞き取り （軽井沢・和気閑谷高校） ・新カリキュラム検討 ・新学科名希望調査の実施	・新カリキュラムの完成（6月まで） ・新学科のスクールポリシー策定 ・個別最適な学びに関する研究（DXWGと共に7月から） ・デュアルシステムの検討 （箕面東、盛岡商業・盛岡農業高校訪問） ・教科・探究学習のあり方検討（DXWGと共に7月から） ・社会教育科目の単位化検討 ・セルフラーニングタイムの検討	・新カリキュラムの運用検討 ・デュアルシステムの検討 （町役場、沿岸広域振興局等との連携） ・社会教育科目の単位化検討 ・セルフラーニングタイムの運用検討
		菅野祐太	畠山　豪			
		皆川直輝	田中貴広			
		長山拓馬	菅崎汐里			
			□星野眞理			
2	DX等教育方法検討WG	◎畠山　豪	〇菊池　直美	・ICT活用案の検討 ・デジタル教材の比較検討 ・新時代に対応した学び方の検討 ・教員の働き方の検討 ・ICTを活用した研究授業（5教科）	・リメディアル教材（紙・アプリ）の活用研究（ICT活用による学び直し） ・個別最適な学びに関する研究（カリキュラムWGと共に7月から） ・教科・探究学習のあり方検討（カリキュラムWGと共に7月から） ・DX研修会の実施（カリWGと連携） ・ICTを活用した教員の授業力向上 ・特別な配慮を要する生徒の支援の研究 ・他校実施授業の単位認定方法の研究	・リメディアル教材（紙・アプリ）の活用研究（ICT活用による学び直し） ・個別最適な学びに関する研究 ・DX研修会の実施（カリWGと連携） ・個別最適な学びへのソフトウェア導入検討 ・先進校視察
		□小野寺綾	佐々木知華			
		渡辺　竜也	佐藤　諒			
		髙原寿希	吉岡信行			
		代田結渚				
3	周知・広報WG	◎ 村上百合子	〇木村有里	・地域内中学生の進学状況分析 ・文化祭における探究学習取組展示 ・探究発表会における探究学習取組展示 ・探究発表会の地域への広報活動 （町内施設への個別訪問・ポスター掲示） ・noteを通した情報発信 ・新学科名希望調査の実施	・新学科の保護者・地域への効果的な周知・広報の検討 ・学校案内の作成（魅力化推進員と共に） ・学校説明会・1日体験入学の企画の見直し（教務課と共に） ・noteを活用した学校情報の発信 ・文化祭の企画（生徒課と共に） ・探究発表会等の企画（魅力化推進員と共に） ・地域協働についての研究協議会の企画	・学校案内の作成 ・学校説明会・1日体験入学の企画の見直し（教務課と共に） ・noteを活用した学校情報の発信 ・探究発表会、研究協議会の企画
		□星野七海	伊勢美和			
		相馬史弥	阿部成浩			
		菊池晃平	中山雅志			

※その他　各グループによる先進校視察

（４）運営指導委員会の体制および取組

ア　運営指導員会の体制

氏　名	所　属・役職等	備　考
牧　野　　篤	東京大学教育学部 教授	教育専門家
佐々木　修　一	富士大学経済学部 教授	学識経験者
福　田　秀　樹	東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター 准教授	学識経験者
久　坂　哲　也	岩手大学教育学部 准教授	教育専門家

イ　取組に対する指導・助言等の専門家による支援について

年間２回の運営指導委員会を開催。委員からは専門的な観点から活動計画や評価方法・検証等について助言をいただき、活動の改善を図った。また、「三陸みらい探究」における生徒の活動に対して指導・助言をいただいた。

（５）コンソーシアムの体制および取組

ア　コンソーシアム（魅力化構想）会議の体制

通番	機関名	機関の代表者名
1	大槌町町長	平　野　公　三
2	大槌高等学校 校長	志　田　　敬
3	大槌町議会 議長	小　松　則　明
4	岩手県議会 議員	岩　崎　友　一
5	大槌町議会 総務教民常任委員会委員長	澤　山　美恵子
6	株式会社千田精密工業 取締役会長	千　田　伏二夫
7	大槌町商工会 青年部　部長	兼　沢　幸　男
8	一般社団法人おらが大槌夢広場 代表理事	神　谷　未　生
9	大槌学園 PTA 会長	兼　澤　幸　男
10	吉里吉里学園 PTA 会長	芳　賀　　新
11	認定 NPO 法人カタリバ 代表理事	今　村　久　美
12	大槌高等学校 同窓会会長	佐々木　慶　一
13	大槌高等学校 PTA 会長	黒　川　由美子
14	大槌町副町長	菊　池　　学
15	大槌町教育委員会 教育長	松　橋　文　明
16	大槌町教育委員	谷　藤　怜　美
17	大槌学園 学園長	小　石　敦　子

18	吉里吉里学園中学部 校長	松　村　厳　寿
19	おおつちこども園 園長	八木澤　弓美子
20	東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター　教授	青　山　　潤

イ　コンソーシアムにおける取組について

・年３回のコンソーシアム（魅力化構想）会議を開催。復興推進のリーダーとなる人材の育成を目指し、大槌町役場、高等教育機関、地域、産業界、NPO 等がコンソーシアムを構築し、協働して子どもたちの実践的な学びを支援しながら地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことで、新しい価値を創造できる人材を育成する。

・令和５年度第２回コンソーシアム（魅力化構想）会議（令和５年 11 月 22 日）では、「これからの大槌高校を考える会」が開催され、100 名を超える、地域住民、生徒、保護者、教職員等が参加し、熟議が重ねられた。

・カリキュラムについてコンソーシアム（魅力化構想）会議において協議した。委員からの指導・助言を学科編成及び大槌高校魅力化の推進に反映した。

（６）コーディネーターの配置および活動内容（◎）

ア　カリキュラム開発等専門家について

菅野　祐太（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　　週４日常駐

活動日程	活動内容
毎月１回	・大槌高等学校の職員会議等に出席 ・魅力化の取組の進捗や運営指導委員会やコンソーシアム等開催された会議の内容を共有
不定期	・学科編成会議の協議進行 ・コンソーシアムによる魅力化に関する会議の企画・運営 ・ワーキンググループ事務局員として参加 ・町立学校コミュニティー・スクール等の会議に参加

イ　地域協働学習実施支援員について

小野寺　綾（本事業予算を使って認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週４日常駐

星野　眞理（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

星野　七海（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

日程	内容
毎月１回	・大槌高等学校の職員会議等に出席 ・魅力化の取組について共有
毎週１回	・１・２年生の総合的な探究の時間の企画・運営 ・教員と打合せを行い、次回の授業方針を決定
年継続	・探究のルーブリック評価の構築
随時	活動の発表および紹介 ・地域の中学校を訪問し中学生に高校を紹介 ・来校者に探究活動について説明・紹介
令和６年４月～ 令和７年３月	・ICT 機器の活用・管理 ・学校横断型探究プロジェクトの企画・運営 ・ワーキンググループ事務局員として参加
令和６年４月～ 令和７年３月	地域との協働による探究的な学びの企画・運営 ・「マイプロジェクト・フィールドワーク」、「大槌発未来塾！」、「SIMulation おおつち町内フィールドワーク」、「マイプロジェクトアワード岩手県 summit」、「三陸みらい探究」等
令和６年 10 月・令和７年２月	・普通科改革支援事業の評価および集計・分析

ウ　カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け

カリキュラム開発等専門家１名、地域協働学習実施支援員３名の計４名（以下「コーディネーター」）が職員室に常駐している。入学者選抜関連以外のすべての会議に参加するなど、教員とともに教育活動を行っている。各学年に最低１人ずつ配置し、学年の活動に参加するなど、生徒の状況を把握しながら活動している。

エ　全国募集活動について

本校では「はま留学」という名称で生徒を全国募集している。コーディネーターが中心となり、副校長、担当教員、大槌町教育員会、生活支援員からなるチームとして動いている。東京で実施されている「地域みらい留学合同説明会」に参加しているほか、オープンスクールを年３回実施し留学を希望する中学生とその保護者に本校を体験してもらう機会を設けている。このほか「地域みらい留学」が主催しているオンラインでの学校説明会においても、コーディネーターが本校の紹介を行っている。

なお、令和６年度からは全校生徒から「はま留学応援団」を募集し、オープンスクールや地域みらい留学合同説明会に参加し、本校の魅力アピールに一役買ったが、これらの生徒の指導もコーディネーターが行っている。

日程	内容
6月29日(土)～30日(日)	第１回地域みらい留学高校進学フェス in 東京（東京）
7月26日(金)～27日(土)	第１回はま留学オープンスクール （参加者：各県の中学生と保護者　２組）
8月17日(土)～18日(日)	第２回はま留学オープンスクール （参加者：各県の中学生と保護者　６組）
8月24日(土)～25日(日)	第２回地域みらい留学高校進学フェス in 東京（東京）
9月15日(日)	第３回はま留学オープンスクール （参加者：各県と中学生の保護者　５組）

（７）新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

ア　新学科設置の検討

東日本大震災以降、人口減少の続く当該地域において、本校は町唯一の高校として存続を図り、地域を支える人材の育成するために、令和元年度からの３年間、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」事業」に取り組んできた。その魅力をさらに高め、地域の中学生から選ばれる学校となるために、既存の普通科の教育課程を改め、新学科へ移行する必要性が持ち上がった。

令和４年度から検討が始まり、普通科２学級のすべてを新しい学科に改める前提で、地域を題材とした探究の実践と充実に向けて、探究科目の充実、科目選択の自由度の向上、社会教育の単位化、キャリア学習の充実（デュアルシステム導入）、復習科目の充実（リメディアル）、授業のオンライン履修の一部認可を盛り込んだ形で教育課程が検討された。これらの実現のために、探究学習と地域との接点の役割を果たすコーディネーターが職員室に常駐し、大槌町役場をはじめ地域の企業や東京大学大気海洋研究所等の研究機関、地域の小中学校や、教育及び地域振興に関わるNPOなどと連携や協働体制を構築することを目指した。

イ　学科編成に関する検討

検討場面・日程	検討内容
普通科改革に関する職員研修 （令和４年５月16日）	普通科改革支援事業採択（４月15日）、計画書提出（５月13日）を受けて、小学科普通科２学級のうち、１学級を地域社会学科（仮）、１学級を普通科とすることで検討を進める方向であることを確認・周知する。
７月定例職員会議 （令和４年７月26日）	全教員からなる３つのWG（カリキュラム、DX等教育方法検討、周知・広報）を立ち上げ、検討に入ることを確認・周知する。
生徒全校ワークショップ（２回） ・ヒアリング・アンケート（１回） （令和４年10月）	生徒アンケートから、50%以上が「希望に合わせた科目選択制」を望み、特に文理コース（進学希望）所属生徒が探究的な科目を選択してより地域の学びを深めたいという希望が多いことを確認する。その後、教員・保護者の声を集めながらカリキュラムWGで今後の方向性についての検討を進める。
第２回コンソーシアム会議 （令和４年12月23日）	委員から小学科普通科においても学校設定科目で実施しているより深い探究的な学びができるかの質問があり、対応できるような課程を検討中と回答。カリキュラムWG中心に小学科を地域社会学科（仮）に

	一本化する検討を本格的に進める。
第４回学科編成委員会 （令和５年１月 26 日）	小学科普通科を設置した場合、科目選択の余地があまりないため、小学科普通科２学級をともに地域社会学科（仮）とし、進学・就職に関係なく科目選択の自由度を高める方向で進めることを確認する。教育課程編成については、カリキュラム WG を中心に進める。
第３回コンソーシアム会議 （令和５年３月 20 日）	令和４年度の事業報告を行った。新学科名について名称候補（教職員・生徒・保護者アンケートより選定）４案を提示する。委員案については、後日提出してもらい選定は学校に一任となった。

ウ　新学科名称に関する検討とスケジュール

令和５年４月に新学科名候補６案（優先順位付けなし）を提出し、県教育委員会で選定が行われた。７月に県議会に上程され、10 月に県議会で条例改正し、正式に「地域探究科」いう名称が採用された。

■岩手県教育委員会提出名称候補６案

No	学科名候補案	名称理由
1	探究科	本校の学びの軸である探究活動をそのまま学科名に落とし込んだ。本校の特色であり軸となる「探究」こそがコンセプトであり学びである。探究をとおしてこれからの時代を生きていくための資質・能力を培っていくことへの期待を込めている。
2	学究科	「学」は学びの学、学問の学、進学の学、「究」は探究の究、研究の究。この漢字２文字を標榜することで、従来の学びと本校の特色である探究で学ぶことができる学科であることへの願いが込められている。コンセプトは、「学問で、探究で、資質・能力（大槌（ハンマー））を身に付ける」である。特にも基礎学力の充実や進学を希望する保護者に対して「学」を組み込むことの意義は大きい。
3	地域みらい科	学校設定教科の名称をそのまま学科名にした。そのことにより、新学科の学びがイメージしやすい。コンセプトは「地域をフィールドに自分の学びを自分でつくる」。地域の、そして自分の未来を創っていく力（大槌（ハンマー））を育むことへの期待を込めている。
4	きぼう創生科	どんな場面でも希望を見出し、自分らしく前を向いて生きていく力を育てる学科。先の読めない時代を生きていくには、何より「きぼう」が必要であり、その「きぼう」はこの学科で身に付けた資質・能力により新たに創り出されていくことへの期待を込めている。
5	地域探究科	自分たちの暮らす地域をテーマとした学びを深め、地域と協働しながら地域社会の課題解決に向けた人材育成を目指す。そして、これからの時代を生きていくために必要な資質・能力を身に付けていくことへの願いを込めている。
6	未来探究科	未来は決して優しい「みらい」とは限らなくて、厳しい現実が待ち受けているかもしれない。漢字を用いたのは、そんな大海のような、先の読めない未来を表現するため。そのような未来に対して、自分や地域の未来につながる力、困難を乗り越える力を探究し、自分の未来を切り拓くことへの願いが込められている。コンセプトは「探究活動をとおして先の読めない時代を乗り越える力を身に付ける」である。

最終的選定理由は、「地域社会が有する魅力や課題等をテーマとした探究的な学びをとおして、地域と協働しながら主体的に課題解決に向けて取り組む人材の育成や、これからの変化の激しい時代を生きていくために必要な資質・能力等を育成するという大槌高校が目指す学びを端的に表した名称である」とされた。

エ　大槌高校新学科設置に関する地域説明会

令和５年 10 月１日（月）に、地域内中学校等教育関係者 14 名、地域住民（中学生及中学生保護者含む）17 名の合計 31 名が参加。活発な質疑応答が行われた。

オ　関係者への説明の実施

管理機関の岩手県教育委員会へは訪問指導の際、運営指導委員会及びコンソーシアム会議、学校評議員会へは、会議の際に進捗状況を報告している。なお、年度末の会議の際は、令和５年度の事業報告及び令和６年度の事業計画の報告を行った。

（８）管理機関における事業全体の成果検証、評価

本事業申請時に提出した目標設定シートに準じて進捗状況の成果を検証する（高等学校）。

ア　卒業時に生徒が習得すべき具体的能力を測るものとして設定した成果目標

下記指標に対する４件法によるアンケートの肯定的回答の割合

三菱 UFJ リサーチによる高校魅力化評価システムの調査結果から抽出したもの。

（単位：%）

	設問	R4 入学生			R5 入学生		R6 入学生
		R4 9 月	R5 7 月	R6 7 月	R5 7 月	R6 7 月	R6 7 月
1	**課題の発見と解決に必要な知識および技能**	**62.7**	**67.8**	**80.0**	**54.2**	**60.2**	**80.2**
	･自主的に調べ物や取材を行う	60.5	68.2	86.0	55.0	64.8	87.5
	･現状分析し目的や課題をあきらかにすることができる	64.9	67.3	74.0	53.3	55.6	72.9
2	**探究の意義・価値理解、地域社会との関わり合い**	**50.9**	**50.0**	**64.0**	**54.3**	**55.6**	**62.5**
	･地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい	47.4	45.5	60.0	58.5	55.6	64.6
	･―誰かに言われなくても自分から勉強する	54.4	54.5	68.0	50.0	55.6	60.4
3	**課題発見・解決への指向**	**57.0**	**59.1**	**78.0**	**62.5**	**61.2**	**69.8**
	･情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	57.9	63.6	84.0	70.0	59.3	70.8
	･地域や社会での問題や出来事に関心がある	56.1	54.5	72.0	55.0	63.0	68.8
4	**主体性・協働性**	**53.5**	**57.3**	**79.0**	**60.8**	**58.4**	**64.6**
	･忍耐強く物事に取り組むことができる	54.4	56.4	88.0	58.3	55.6	70.8
	･自分の考えをはっきりと相手に伝えることができる	52.6	58.2	70.0	63.3	61.1	58.3
5	**価値創造への提案と次へつながる学び**	**45.6**	**52.8**	**66.0**	**50.0**	**61.2**	**60.5**
	･国や地域の担い手として、政策決定に関わりたい	31.6	36.4	52.0	31.7	51.9	31.3
	･学習を通じて、自分がしたいことが増えている	59.6	69.1	80.0	68.3	70.4	89.6

※　本事業開始年度に入学した R4 入学生について、全ての項目で大きく向上が見られた。また、R5 入学生は「課題の発見と解決に必要な知識および技能」、「価値創造への提案と次につながる学び」について向上しているが、「課題発見・解決への指向」と「主体性・協働性」には大きな変化は見られなかった。R6 入学生については、全ての項目で過去 2 カ年を大きく上回る数値となっている。当該校のアドミッションポリシーが周知され、探究的学習に対して意欲と能力の高い生徒が入学しているためと考えられる。

イ　目標設定シートについて（別添）

ウ　今後の自走に向けた方向性について（管理機関評価）

	大槌高校	岩手県平均
社会性に関わる学習活動	61.0	45.6
社会性に関わる学習環境	75.1	63.9
社会性に関わる行動	53.5	35.3
探究性に関わる学習活動	71.7	62.9
協働性に関わる学習環境	78.6	76.2
主体性に関わる学習活動	65.8	52.4

当該校では、地域との連携・協働、コーディネーターの配置、探究的な学びの充実及び目指す人材育成のためのカリキュラムマネジメントなど、県内の高校のモデルとなる取組を推進しており、大槌高校の普通科改革支援事業における地域協働の取組を高く評価している。

高校魅力化評価システムの調査結果を岩手県全体のデータと比較すると、昨年度までも比較的高い数値であった「社会性」と「探究性」に加え、今年度は「協働性」、「自主性」に関わる項目についても、大槌高校生徒の肯定的な回答の割合が向上し、県平均を上回っている。このことから、魅力的な学びの環境を地域と共に創るという事業構想の具現化が着実に進んでいるとともに、協働的に学ぶ環境が整ってきていることにより、主体的に学習に取り組む姿勢が涵養される結果となっていると評価することができる。

また、令和５年 11 月にはコンソーシアム会議内で、「これからの大槌高校を考える会」が開催され、地域、生徒、保護者、学校の職員等が参加し、熟議が重ねられた。学校とコンソーシアムが協働しながら組織的に取り組んでいることは、県内のモデルケースになると考えている。

国の指定終了後も大槌町との協力体制を継続強化しながら、個別最適な学びと協働的な学びの効果的実現に向けて準備を進めていく。

（９）管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

当該校は学校独自の学校設定教科・科目を設け、個別最適な学びと協働的な学びの充実を目指している。これらの学びの実現のために、継続的な教員加配措置に係る支援と専門的知見を有するコーディネーターの配置について、引き続き検討していきたい。

(10) 成果普及のための取組

ア　他校交流

年間を通して多くの学校と探究活動、教育課程、地域連携、全国募集、学校運営等について意見交換をする機会が得られ、本校の教育活動の参考にすることができた。

実施日程	他校交流
５月 21 日(火)	長野県須坂東高等学校来訪（高校魅力化事業に関する意見交換） 来訪者：教諭４名
８月１日（木） ～８月２日（金）	大阪府立布施北高等学校及び兵庫県立御影高等学校訪問 （デュアルシステムに関する意見交換）　　訪問者：教員１名
９月13日（金）	令和６年度第１回「いわて高校魅力化」研修会（本校会場） （主催：岩手県教育員会学校教育室高校改革課） 参加者：県内各高等学校教員、コーディネーター等41名）
10 月 23 日(水)	宮城県大河原産業高等学校（魅力化構想会議参観及び高校魅力化に関する意見交換） 訪問者：教頭１名、教員６名、学校運営協議会３名
11 月５日(火)	静岡県立松崎高等学校（高校魅力化事業及び探究学習に関する意見交換） 訪問者：教頭１名、教員２名
１月 23 日(木)	静岡県立川根高等学校（普通科改革、探究学習及び地域みらい留学に関する意見交換） 訪問者：副校長１名、教員１名
２月 14 日（金）	宮城県宮城広瀬高等学校来訪（普通科改革及び探究学習に関する意見交換） 訪問者：教諭１名
２月 19 日(水)	新潟県立中条高等学校（普通科改革及び地域みらい留学に関する意見交換） 訪問者：教諭１名

イ　活動の内容や状況について学校ホームページや note で公開している。また、大槌町の広報誌に毎月活動の様子を掲載し町内へ広報している。

ウ　管理機関が実施する各種協議会等において本校の取組を周知し、地域と協働した教育活動による学校の特色化・魅力化を推進している。

エ　周知・広報 WG により町内各所に各探究発表会の案内、生徒の研究発表成果物の展示を行っている。

オ　毎年、地域協働についての研究協議会を開催し事業の成果を発表している。今年度も２月の探究発表会に併せて開催する予定である。

カ　令和６年度については、より詳細な新学科の内容を中学校、周辺住民に伝える広報活動を周知・広報 WG を中心に進めた。今度とも本校の「魅力化」の内容を発信していきたい。

(11) 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組（特に予算・人員配置について）

事業３年目に新学科を設置したが、事業２年目までに設置に向けた取組を進めるとともに、教職員に過度な負担とならないよう業務が円滑に進む体制を整備した。３年目は設置した新学科において特色ある教育活動を実践した。個別最適な学びと協働的な学びを一体的に行うためには個に応じた柔軟なカリキュラムが必要である。そのため令和６年度の実施状況

を踏まえて、学校設定教科・科目や探究的な活動の評価し、必要に応じて再構築等を検討していく。

令和７年度以降は大槌町との協力体制を継続・強化しながら、管理機関として、当該校が本県の最先端校として常に新しい学びを実践していく体制を維持し自走できるよう支援していく。

事業終了後も大槌町行政との強い連携を維持するために、教育課程と町の計画である教育大綱・総合計画との連動を図る。そのため、学校運営協議会等で収集した地域のニーズを必要に応じて教育課程に反映させるとともに、学校広報を積極的に行い、高校が地域にとって果たす役割を周知していく。

また、事業終了後もコーディネーターの配置等、事業計画を推進する上での経費の継続的な支援を検討していきたい。

【担当者】

担当課	学校教育室　高校教育担当	ＴＥＬ	019-629-6140
氏　名	川又　謙也	ＦＡＸ	019-629-6144
職　名	指導主事	e-mail	ri-kawaken@pref.iwate.jp

Ⅱ　研究開発の内容（詳細）

１　会議関係

（１）魅力化構想会議・コンソーシアム会議

大槌高校では、高校と町行政、町議会、各種学校の教育機関及び企業、研究機関との連携を拡充するとともに、生徒の主体的な学びへとつながる様々な教育機会の提供の充実を図り、県が設置するコンソーシアム会議と町が主催する大槌高校魅力化構想会議を設置している。

ア　魅力化構想会議・コンソーシアム会議 委員

No	氏名	所属・役職
1	平　野　公　三	大槌町長
2	青　山　　潤	東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター 教授
3	小　松　則　明	大槌町議会 議長
4	志　田　　敬	大槌高等学校 校長
5	岩　崎　友　一	岩手県議会議員
6	澤　山　美恵子	大槌町議会 総務教民常任委員会委員長
7	今　村　久　美	認定 NPO 法人カタリバ 代表理事
8	千　田　伏二夫	株式会社千田精密工業 取締役会長
9	神　谷　未　生	一般社団法人おらが大槌夢広場 代表理事
10	兼　澤　幸　男	大槌商工会青年部 部長 大槌学園 PTA 会長
11	芳　賀　　新	吉里吉里学園 PTA 会長
12	佐々木　慶　一	大槌高等学校 同窓会会長
13	黒　川　由美子	大槌高等学校 PTA 会長
14	菊　池　　学	大槌町副町長
15	松　橋　文　明	大槌町教育委員会 教育長
16	小　石　敦　子	大槌学園 学園長
17	松　村　厳　寿	吉里吉里学園中学部 校長
18	谷　藤　怜　美	大槌町教育委員
19	八木澤　弓美子	おおつちこども園 園長

イ　魅力化構想会議・コンソーシアム会議 参加者

No	氏名	所属・役職
1	中　村　智　和	岩手県教育委員会事務局 学校教育室高校教育課長
2	作　山　雄　一	大槌高等学校 事務長
3	畠　山　　豪	大槌高等学校 教務課長 DX 等教育方法検討 WG 長
4	八　尾　晃　一	大槌高等学校 生徒指導主事
5	田　中　貴　広	大槌高等学校 進路指導主事
6	松　田　明日香	大槌高等学校 １学年長 カリキュラム WG 長
7	村　上　百合子	大槌高等学校 周知・広報 WG 長
8	菊　池　直　美	大槌高等学校 ３学年長
9	佐々木　知　華	大槌高等学校 ２学年長
10	藤　原　英　志	大槌町 産業振興課長

ウ　魅力化構想会議・コンソーシアム会議 事務局

No	氏名	所属・役職
1	川　又　謙　也	岩手県教育委員会事務局 学校教育室高校教育担当指導主事
2	伊　藤　　晃	大槌高等学校 副校長
3	吉　田　　智	大槌町教育委員会事務局 学務課課長
4	関　谷　辰　也	大槌町教育委員会事務局 学務課上席係長
5	菅　野　祐　太	大槌町教育委員会事務局 教育専門官
6	小野寺　　綾	大槌高等学校　魅力化推進員
7	星　野　眞　理	大槌高等学校　魅力化推進員
8	星　野　七　海	大槌高等学校　魅力化推進員

エ　第 18 回大槌高校魅力化構想会議兼

令和６年度普通科改革支援事業第１回コンソーシアム会議

日　　時：令和６年６月 26 日（水）10:00～11:15

場　　所：大槌町文化交流センター（おしゃっち）多目的ホール

内　　容：事業経過報告、普通科改革支援事業について（デュアルシステムの検討状況、個別最適科目の実施状況）、全国留学事業について（今年度の県外入学者数、留学生による留学生活に関する発表）※今回は報告事項と生徒発表のみ。

発言要旨：

［事務局より報告］

・　生徒や保護者を対象に行ったアンケートにおいて、**インターンシップに関する科目が必要だという声が多かった**。そうした経緯から、「働きながら学ぶ、学びながら働く」を目指した新たな科目（デュアルシステム）の導入を目指している。具体的には、２年生の１年間で**一次産業から三次産業までを幅広く経験できるスケジュール**を検討している。高校生はもちろん、町や地域、企業にもメリットがある取り組みとしていきたい。

・　今年度の１年生から地域探究科となり、新しい科目である「個別最適科目（数学・英語）」がスタートした。この科目では**①基礎学力を定着、②自己肯定感と有用感、学習に対するモチベーションの向上、③自分の学習の仕方を調整する力の向上を目指している。**入学後１か月かけて生徒全員と面談を実施し、最終的には保護者の承諾も得て受講生を決定した。数学が 13 名、英語が 15 名受講しており、まだ約１ヶ月しか経っていないが、**現状はその全員がこの科目の授業内容を肯定的に捉えてくれている**。

・　個別最適科目を導入したことによって、むしろ、個別最適科目を選択しなかった生徒にとっても学びやすい環境がつくれている。これまでは、様々な学力層の生徒が同じ教室で同じ内容の授業を受けていたが、**大学進学を目指したい子やより難しい問題を解きたい子にとっても、更に能力を伸ばしてあげられるような体制になった**。

・　今年度の県外留学生は、宮城県、山形県、千葉県、埼玉県、神奈川県から５名が入学した。全員が男子生徒で、海や魚が好きで、東大海洋研との連携に興味がある生徒や、ジビエに興味がある生徒など、大槌町や大槌高校ならではの学びに興味を持って入学をしてくれた。
・　留学生を受け入れる下宿先は、今年度から親戚等ではない一般の個人宅でも受け入れがスタートした。

オ　第19回大槌高校魅力化構想会議兼
令和６年度普通科改革支援事業第２回コンソーシアム会議
日　　時：令和６年10月23日（水）14時30分～16時00分
場　　所：大槌町中央公民館大会議室
内　　容：事業経過報告、普通科改革支援事業について（デュアルシステムの検討状況 個別最適科目の実施状況）、全国留学事業について（留学生の募集状況、下宿先の確保状況）、これまでの政策評価と、今後の取り組みの方向性に関する協議

発言要旨：
［事務局より報告］
・　デュアルシステムについては、大槌町役場にも協力をいただきながら引き続き内容の検討を進めている。今後は協力してくださる企業側との調整を進めていき、生徒が町に飛び出して学びを深められる環境を整えていきたい。
・　個別最適科目（数学・英語）については、順調に進んでいる。生徒の満足度が高い中で、教員にとっても多くの学びが得られている。生徒がどこでつまずいているのかより明確になったし、生徒が前向きに、楽しそうに取り組んでいる姿を見られるのが、教員にとってもすごく嬉しいことである。今後は授業を担当する教員の役割と、自己調整能力を向上させるための効果的な方法についてより考えていきたい。生徒の取り組む内容がバラバラになってきた中で、それぞれに個別対応していては教員の数が足りない。自己調整能力に関しては専門家とも連携しながら研究していきたい。
・　生徒募集に関することについては、１日体験入学の内容や、noteの活用について工夫して取り組んでいる。noteは、様々な教員や生徒が手分けして協力して記事を書き、発信していく体制をつくっている。
・　はま留学の生徒募集は、全国留学制度を取り入れる自治体や高校が増加しており、募集の難易度が上がっている。その中で大槌高校は何とか健闘しており、今年度は10名ほどが受検する見込みである。今年は、１日体験入学や、東京での説明会の場において、生徒自身が説明し中学生と交流する時間を多く設けていることが、上手くいっている要因になっているのではないか。

・　今年度は４月からの約半年間で、のべ 650 名の生徒が学校の授業以外で地域の活動に参加している。昨年度の同じ時期の約４倍になっており、このまま行くと年間で 1000 名を超える見込みである。地域も様々な活動で担い手を求めているため、高校生が積極的に協力してくれるのは町にとっても有難い。

・　留学生を含めた、大槌町外から入学してくる生徒が増加しており、その数は魅力化事業を開始した頃よりも約２倍になっている。そうした生徒の存在は大槌出身の地元生にもいい影響を与えており、町外の生徒の活動に町内の生徒が刺激を受け、巻き込まれている光景も見え始めている。

・　大槌高校は、魅力化を始める前と比べると全く別の高校になっている。令和元年に魅力化推進員が配置されたことによって、地域との協働が一気に進んだ。県外からの生徒募集においては、東大海洋研の存在も大きい。６年間で、文科省の事業の指定も２受けながら改革を進めてきた中で、新しいことにチャレンジし、変化に強い学校をつくっていくことも大事にしてきた。大槌高校もここからは成熟期に入っていくと思うが、今後人口減少の影響で２クラスの維持がより困難になっていくと予想される。その中で、予め手を打ち、魅力化推進員や東大海洋研の知見も得ながら、より関係を強化していく必要がある。

［委員からの意見］

・　事業開始以前と比べて、大槌高校は劇的に変わったと感じている。一方で、その魅力が中学生や保護者になかなか伝わり切っていない部分がある。中高連携で行う探究の取り組み等もあるが、その内容をより工夫して、中学生が大槌高校生に更に憧れを持てるような工夫をしていくべきではないか。

・　探究学習を活かした大学進学者の数も増加しているが、中学生や保護者のイメージはまだ変わり切っていないように感じる。大槌高校は進学にも強いというアピールも更に進めていってほしい。

・　県外からの留学生の定員の枠があるのがもったいないと感じている。

・　幼保が震災から 13 年かけて人口減少の影響を受けたように、10 年後には大槌高校が同じような状況になることが予想される。今から手を打っていく必要がある。

・　昨年度の大槌町の出生人数が 38 名だったことを考えると、高校の魅力化だけではなく、町全体の教育施策として、家族移住や保育園留学等も視野に入れた議論が必要になってくるのではないか。

・　個別最適科目やデュアルシステムの構想はものすごくいいと思うが、本来小中学校時代に身に付けなければいけないものを、高校で補わなければいけないという現状について

もっと考える必要があるのではないか。

・ 高校の魅力化はカリキュラムがつくるものではなく、地域がつくるものだと思う。こうしたコンソーシアムの場がしっかりと機能して、喧々諤々と何度も議論を重ねることは他の地域ではなかなか真似できない。その熱量を絶やさないことが何よりも大事なのではないか。

・ 高校生の保護者の立場の意見として、大槌高校は入らないと損する学校だということを自慢したいと思っている。息子も実際に魅力化推進員や東大海洋研と関わらせていただいて、卒業後の夢を持つことができた。とにかく学校生活が楽しいという様子を毎日見られるのが保護者として嬉しかった。

・ 魅力化推進員の存在は教員としてもとても有難い。生徒にとっても学びの幅が格段に広がるし、魅力化推進員が生徒と関わる姿や声掛けの方法を見ていて教員自身が学びをもらっている。

カ　第 20 回大槌高校魅力化構想会議兼
令和６年度普通科改革支援事業第３回コンソーシアム会議
日　　時：令和６年２月 20 日（木）15 時 00 分～16 時 30 分
場　　所：大槌町文化交流センター（おしゃっち）
内　　容：事業経過報告、普通科改革支援事業の総括、全国留学事業について（留学生の募集状況、下宿先の確保状況）、今後の取り組みの方向性に関する協議

（２）運営指導委員会

大槌高校では事業の効果を高めるため運営指導委員会を設置し、研究開発の実施状況について有識者から評価助言を頂いている。

ア　運営指導委員会委員

No	所属	氏　　名
1	東京大学教育学部 教授	牧　野　　篤
2	富士大学経済学部 教授	佐々木　修　一
3	東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター 准教授	福　田　秀　樹
4	岩手大学教育学部 准教授	久　坂　哲　也

イ　出席者：

No	所属	氏　　名
1	岩手県教育委員会事務局 学校教育室 高校教育課長	中　村　智　和
2	岩手県教育委員会事務局 学校教育室 指導主事	川　又　謙　也
3	大槌高等学校 校長	志　田　　敬
4	大槌高等学校 副校長	伊　藤　　晃
5	大槌高等学校 事務長	作　山　雄　一

6	大槌高等学校 教務主任・DX 等教育方法検討 WG 長	畠　山　　豪
7	大槌高等学校 進路指導主事	田　中　貴　広
8	大槌高等学校 生徒指導主事	八　尾　晃　一
9	大槌高等学校 カリキュラム WG 長・1 学年主任	松　田　明日香
10	大槌高等学校 周知・広報 WG 長	村　上　百合子
11	大槌高等学校 ３学年主任	菊　池　直　美
12	大槌高等学校 ２学年主任	佐々木　知　華
13	大槌町教育委員会学務課　課長	吉　田　　智
14	大槌町教育委員会学務課　上席係長	関　谷　辰　也
15	大槌町教育委員会学務課　指導主事	照　井　善　博
16	大槌高校カリキュラム開発等専門家	菅　野　祐　太
17	大槌高校魅力化推進員	小野寺　　綾
18	大槌高校魅力化推進員	星　野　眞　理
19	大槌高校魅力化推進員	星　野　七　海

ウ　令和６年度第１回運営指導委員会

日　　時：令和６年６月 10 日（月）14 時 00 分～16 時 00 分

場　　所：岩手県立大槌高等学校

内　　容：事業概要説明

令和６年度事業計画に関すること

ワーキンググループの推進状況に関すること

研究開発成果の分析・検証等に関すること

「総合的な探究の時間」に関すること

「個別最適科目」の推進に関すること

発言要旨：

［ワーキンググループの進捗状況に関すること］

・　周知・広報に関して、生徒からの発信の方が訴えるものがあるので、生徒からもっと発信されていくとよいのではないか。

［総合的な探究の時間・探究的な学びに関すること］

・　地域や学校内の大人と良い関係性が構築される前に教え込むと生徒にとっては自分事にとらえられないので、
自分らしさを求めるマイプロを学校でし続けて行ったり、地域で受け止める関係を作っていくことが大事なのではないか。

・　現在マイプロジェクトは、結果的に目指す構成やアセスメントに近づけているかというような、仮説検証をすることがよいこととされているが、**やっていくうちにどんどん新**

しいことに気付いていって、それこそセレンディピティが起こるような在り方がよいのではないか。

［個別最適科目の推進に関すること］

・　間違った箇所を学習し直す学習方法だと偶然正答した問題の再学習されない恐れがあるため、採点をする前に、生徒が自分の答えが合っていると思うかという判断をさせてから採点をすることによって、学習判断のメタ認知の精度がどんどん上がっていくのではないか。
・　個別最適で基礎を固めていくと、生徒は通常の教科書の問題を解ければいいな、解けるようになりたいと思うので、教科書の問題まで挑戦させるとよいのではないか。
・　問題を解くことができることだけでなく、生徒が学ぶ喜びを感じ取るようことができるようにリメディアルというものを今後個別学習、個別最適にもっていくことが、子どもたちの肯定感を高めていく、あるいは学ぶ喜びにつながっていく可能性があるのではないか。
・　子どもたちが学ぶ喜びを感じていきながら、この４つの特色ある学びを構造化していくことができるのではないか。

エ　令和６年度第２回運営指導委員会

日　　時：令和７年２月 12 日（水）15 時 00 分～16 時 30 分
場　　所：岩手県立大槌高等学校
内　　容：地域協働カリキュラムの実施状況に関すること
　　ワーキンググループの推進状況に関すること
　　普通科改革支援事業の総括・代表生徒発表

（３）普通科改革研究協議会

日　　時：令和７年２月 22 日（土）15 時 20 分～16 時 40 分
場　　所：大槌町文化交流センター おしゃっち
内　　容：有識者、生徒が登壇するパネルディスカッション

［パネルディスカッションテーマ］
「元高校生クイズ王者と考える！これからの時代に必要な探究とは？」

［登壇者］
・　田村 正資氏　（株式会社 baton(Quizknock) 新規事業開発・哲学研究者）※ゲスト
・　寺脇 研氏　（映画評論家・京都芸術大学客員教授）※モデレーター
・　飛田 冴英　（大槌高校３年生）
・　阿部 豊　（大槌高校２年生）

研究協議会　登壇者プロフィール

田村 正資氏（株式会社 baton(Quizknock) 新規事業開発・哲学研究者）
1992 年東京都生まれ。伊沢拓司とともに第 30 回高校生クイズ優勝（2010 年）。株式会社 baton(Quizknock)では新規事業を手掛ける。そのかたわらで哲学研究者・作家としても活動しており、主著に「問いが世界をつくりだす」があるほか、『群像』誌で「あいまいな世界の愛し方」を連載中。

寺脇 研氏（映画評論家・京都芸術大学客員教授）
1952 年福岡県生まれ。東京大学法学部卒業後、文部省に入省。初等中等教育局職業教育課長、広島県教育長、高等教育局医学教育課長、生涯学習局生涯学習振興課長、大臣官房審議官などを経て、2002 年より文化庁文化部長。06 年退官。『文部科学省 「三流官庁」の知られざる素顔』『「学ぶ力」を取り戻す　教育権から学習権へ』『危ない「道徳教科書」』など著書多数。

研究協議会内容：

ア　登壇者自己紹介

イ　登壇生徒による探究学習に関する発表
阿部 豊　「発表テーマ：新しい学びを与えてくれた地域での経験」
飛田 冴英「発表テーマ：これまでの自分の価値観を変えた探究活動」

ウ　田村正資による発表
「発表テーマ：未来の探究」

エ　パネルディスカッション

（モデレーター　寺脇氏）

・ 日本で最初に探究学習が始まったのは、田村さんが生まれた年である 1992 年に、小学校１・２年生で「生活科」という科目が導入されたタイミング。それから 33 年経ち、その年に生まれた田村さんが探究についてのお話をしてくれる時代になった。世の中が変わるのには大体 30 年くらいかかる。大槌高校は特別なお金を注ぎ込んだ訳でも、特別な生徒だけを選抜した訳でもない学校だけど、これだけの発表ができるようになっている。30 年前は小学校１・２年生だけだったのが、高校３年生までが探究学習を通して自分がどんな力を身に付けたのかを話せるようになっている。その光景を見て、私からは申し上げることはもうないと思った。まずは、飛田さんと阿部さんに、先ほどの田村さんのプレゼンを聞いてどんなことを思ったのかをぜひ聞かせてほしい。

（３年生　飛田さん）

・ 私は、大槌高校に入学した理由が「推薦で大学に進学したいから」だった。学力で大学受験に挑戦する道もあったが、人生の中で勉強だけではない経験もたくさんしたいと思って大槌高校に入り、１年生の頃からマイプロジェクト（探究学習）に取り組んできた。途中モチベーションが下がった時期もあったが、２年生の時に出場したマイプロジェクトアワードという探究学習のコンテストで賞が取れたり、マイプロジェクトを通して知識が増えたり、自分のやりたいことが見えたりして、３年生でももっと頑張ろうと思えるようになった。また、海外の事例についても調べてみたいと思い、英検も頑張るようになったりと、探究をきっかけに教科の勉強のモチベーションも上がった。田村さんは先ほどのプレゼンで「楽しいから探究をスタートさせる」ということを話していたが、「楽しいから入る」人がいてもいいと思うし、私のように「進路から入る」人がいてもいいと思う。結果的に自分自身が良かったと思えることが１番大事だと思う。

（２年生　阿部さん）

・ 私は大槌高校に入った理由は「なんとなく」だった。マイプロジェクトもなんとなく始めて、最初はインターネットで調べるだけで全然楽しくなかった。ただ、１年生の後半から２年生にかけて、自分だけでなくて地域や外にどんどん出て活動するようになった。先生方も協力してくれて、防災ジュニアリーダー育成合宿で長崎にも行かせてもらったし、今後も宮城県や、石川県の能登でも活動させていただく予定になっている。その中で、活動がどんどん楽しくなっている。「楽しむ力」というのは、活動のエネルギーになると思う。これから大槌高校に入学してくる人は、入学して実際にやってみるまではマイプロジェクトのことは実際よく分からないと思うが、１回やってみたらその楽しさは忘れられなくなる。そう考えた時に、「楽しむ力」というのはやはりすごいなと思う。

（寺脇氏）

・　２人ともありがとうございます。話を聞いていて思ったのは、探究は、それに取り組んでいる人だけが楽しいのかということ。きっとそれだけじゃないと思う。この探究発表会に来て私が感じているのは、見に来ている大人が楽しい気分になっているということ。去年もすごかったが、今年はそれ以上によりその傾向が強くなっている。私は「生涯学習」という言葉を広げてきたが、これは「学ぶのは学校にいる時や若い時だけではない。死ぬまで色んなことを学んで色んな刺激を受けて、新しい考えを生んでいく」ということ。生涯学ぶ楽しさを味わっていけるようにしたいと思っていた。阿部君が取り組んだ、災害の時に逃げられない高齢者をリヤカーで運ぶという活動の発表に対して、発表を聞いた高齢者がそれぞれ手を挙げて、様々な意見を述べていた。最前列で聞いていた 85 歳の方は「その考えは大変有難いけど、今後高齢者の数がどんどん増えていく中で本当にできるのかな」と発言していた。次に手を上げた高齢者は「若い人が自分たちを助けてくれるのは有難いけど、それに甘えちゃいけない。若い人も若い人で自分の命を大切にしてほしい」と発言した。３番目に発言した高齢者は「私は足が悪いから、いざという時の覚悟はしている。でも、こういう風に思ってもらえているというだけで私は嬉しい」と言っていた。これまで会ったことがない方が、それぞれ自分で選択した高校生の発表を聞きに行って、その場に参加して自分の意見を述べる。大槌高校の探究発表会は、大槌町民全体の学びをつくっていると言えるのではないか。こういった動きが社会全体に広がっていくことが、田村さんのプレゼンのテーマでもあった「未来の探究」の姿ではないか。

（ゲスト　田村氏）

・　飛田さんの、探究に取り組む過程で英語をもっと学びたいと思うようになったという話がまさに、私がプレゼンで言った「学びを自分の手に取り戻す」ということだと思っている。また、少し話が変わるが、私は先ほど職業柄もあって「楽しむ力」ということをものすごく強調した。これが私の中では１番の理想像であることは変わらない。楽しそうにしている人の周りには、その輪に入りたい人が集まってくる。そんな空間が広がっていくことが理想なのは間違いないが、「楽しい」という感情以外でも私たちは繋がれるし、分かち合って価値を共有できると思っている。それを今日強く感じたのは、震災の伝承に関する発表を聞いた時だった。震災で経験した「悲しみ」をどう繋げていくのかということを考えた。「悲しみ」を単に悲惨なものとして伝えていくということではなくて、どうしたらそこに感情的なレベルとしてバイスタンダーとしていられるのかということや、震災を経験していない者でも、どうしたらそれを自分の中にもあり得ることとして語り直すことができるのか。そして、語り伝えていけるのか。こういう風に、「喜び」でも「悲しみ」でも、色んな感情を起点に私たちは繋がることができる。また、そういう感情で繋がって、「これも必要だね」「こういうことができるともっといいね」と思えた瞬間が、「学びが自分のものになった瞬間」なんだと思う。今日の発表会では、高校生が自分の体験をどんどん豊かにしていって、自分の学びを取り戻している瞬間にたくさん出会えた。僕自身は、大槌のみなさんが共有してくれたような経験もしていないし、教育に携わった経験も多くない中で、こういう瞬間を見れて本当に良かった。そして、こういう場から何かま

た新しいものが始まっていく予感もする。その空気をみなさんで共有できていることが大変喜ばしいし、同席できたことが大変幸せだと感じている。

（寺脇）

・ 今日の場は田村さんにとっても学びの場になっていて、私自身にも学びの場になっている。もちろん、この会場にいるみなさんにとってもそれはきっと同じである。先ほどの話の続きだが、85 歳の高齢者から「若者は本当に我々の命を助けてくれるのか」と問われた阿部君が、「答えになっているか分かりませんけど、僕は将来もずっとこの大槌にいます」と言った時に、会場にいた高齢者たちが安心している空気が伝わってきた。また、飛田さんも発表の中で、これまでどれだけの人にお世話になったのかを実感できたと話していた。他にも、ご両親が聞きに来た発表や、保育園の時の先生が聞きに来た発表もあって、そういう人たちの存在があって今日のこの発表の場があるということをみんな感じていた。昔はこういう学び合いが地域で自然に起きていたのだが、その自然が今はできなくなってしまっている。そういう状況の中で、どんな学びをつくっていくのかが重要である。この大槌からぜひ発信していってほしい。また、飛田さんが、「大学受験の時に、学力ではなくて自分が何をやったかで見てほしい」と話していたが、大学入試だってそうした子どもたちの声によって変わってきた。学び方を彼女たちが変えていっている。そうするとひょっとしたら「田舎ってこういうものだ」と思っていた価値観が変わり、田舎が滅びる場ではなく、魂が続いていく場になるかもしれない。そういうことを、登壇している２人だけでなく、大槌高校生全員が教えてくれている。この発表会も、選抜された生徒だけでなく、全ての生徒が発表するという形式なのがまたいい。田村さんは、今日聞いた発表で特に心に残っているものは何かあるか。

（田村）

・ 森林整備の活動をした生徒が「木を積み上げる感覚が楽しかった」と話したのも面白いと思ったし、海洋ごみの活動をした生徒が、最初はビーチクリーンに取り組んでいたが、途中で単に清掃をするだけでなく、清掃という活動が社会の中でどのように位置づけられるのかと考え、大槌の海を活用して町を活性化させるという考えに発展していった過程がいいと思った。プロジェクトの過程で飛躍・発展していく瞬間や、自分と社会の繋がりを感じた瞬間の中に、楽しさを見出しているのだと思う。そういった瞬間を大事にしている発表が多くて素敵だと思った。他にも、大槌の特産品を使った屋台の新メニューを考えていた生徒が、ピーマンでスイーツを開発しようとしていたのも面白かった。「なぜ甘いものに苦いものを組み合わせるのか」と思わずつっこんでしまったが、きっとその発想の裏には何かがあったはず。普通に考えると排除してしまう選択肢を選べるというのは、内容が予め決められていないマイプロジェクトという活動だからこそ実現できるのであって、普通の教科の枠の中だと「ピーマンは甘い物との相性が悪いから選択肢から外しなさい」と先生から指導されてしまうかもしれない。「試してみたらやっぱり苦かった」という感覚が大事なのであって、そういうことを積み上げていくのが重要だと思う。私自身もクイズを極める中で「体験したことのない知識だけを詰め込んでいるだけだ」という批判

をよく浴びるが、クイズを通して知っていることが体験として結びつく瞬間が面白い。今回岩手に来るにあたって、「岩手だったら宮沢賢治の何かに出会えるかな」と期待していたら、新花巻駅で降りた時に早速山猫軒があって感動した。こういう発見や気づきが大切なのだと思う。発表を 10 分で綺麗にまとめるようとすると、そういったエピソードはよく抜け落ちてしまうものだが、ちゃんと垣間見える発表も多くあって良かった。

オ　参加者からの質問・感想

（参加者）

・　「楽しい」という感覚を持って学ぶことは理想だが、一方で試練や大変さを乗り越えた時に学べるものや、得られる能力や経験もあると思う。試練を乗り越えないと得られないというのもあまり好きではないが、田村さんはその辺りをどのように捉えているか。

（田村）

・　勉強や学びには、いわゆる筋トレ的に頑張らなければいけない部分がどうしてもある。「こうすればいい」という唯一の正解がある訳ではないから、先生方は日々悩みながら生徒さんと向き合っているし、寺脇さんも時代の変化に合わせた教育改革をされてきたのだと思う。僕自身も自分のできる範囲で色々と取り組んでいるので、「楽しみがあれば全部解決」とは思っていない。ただ、何のために頑張るのか、頑張った先に何があるのかという部分を示していくのは大人の義務だと思う。学んだ先に、単に辛かった経験で終わらせないということが、大人が子どもたちに対してできることだと思う。だから僕たちは、Quizknock というメディアを通じて、勉強したことやテストのために覚えたことで楽しく盛り上がれるという可能性を提示している。また、僕たちの場合はそれがクイズだが、人によってはそれがスポーツとかゲームの場合もある。手段は何であれ、色んな実践を楽しんでいる姿を見せていくことが大人の義務ではないか。達成感や、取り組んだ先のイメージはなるべく持たせてあげたい。つまらなそうな大人を見た子どもは、その町や社会にはきっと期待をしないし、もっと楽しそうなところに出て行ってしまうのではないか。

（参加者）

・　田村さんが思う、「これからの若い世代に求められること」について聞きたい。

（田村）

・　１つは、何度も話してしまっているが「楽しむ力」。それをみんなに持ってほしいというか、きっと誰しも持っているはずなのでそれを引き出してあげたい。それとは別の視点だと、「真面目になりすぎない」ということかなと思う。僕の発表の中で、「自己満足の力」の必要性を語ったが、だからといって、大人が言っていることを無視すればいいということではない。大人から与えられた枠を意識しつつも、その中で適度にずるく楽しむということをやっていいと思っている。例えば、大槌や岩手、東北というような、過去の辛い記憶がある土地で探究に取り組むと、どうしてもシリアスな話題が出てくるし。そこに取り組むことは、大人側は無条件にいいことだと思うかもしれないが、子どもにとっては辛い

ことかもしれない。楽しみながら、ヘラヘラしながら取り組んではいけないと思い過ぎてしまうときっと苦しい。だからこそ、相手に失礼になり過ぎない程度であれば、その中に楽しさを見出してもいいということを僕は伝えたい。大人の言うことを聞きすぎると真面目になってしまうが、そうならず、適度にずるく楽しみながらも社会とも繋がっていくというバランス感覚が求められるのではないか。

（参加者）

・ 私は勉強が嫌いだった。「とにかく知識を得なさい」「ここがゴールです」と大人から言われ続けてきたが、大槌には学びを見つけるための構造というか、カリキュラムの工夫があると感じた。もちろん大槌にしかない土地の力もあると思うが、もしその構造をつくれたら場所や土地は関係なく他でも活かせるのではないか。そうした構造をつくるとした時に、先ほど話していた「適度なずるさ」はどのように位置づけていったらよいか。

（田村）

・ まずは大槌高校、そしてそれを支える大槌町のみなさんの努力や協力があってこの構造ができているということを僕は強く感じた。Quizknock という、ややチャラチャラしたイメージがある活動をしている身からすると、これだけの人が関わって初めて強い構造が出来上がっていくということを今日学ばせていただいた。そのうえで、「適度なずるさ」を入れていくというか、上手く緩急をつける環境をつくるためには、色んな人がいるということが重要だと思う。大槌高校では、教員ではない立場の大人が職員室にいたり、放課後の学びの場を運営している。そうした、生徒と先生といった関係性だけではないものが、学校という学びの場の中に設計されていることが大事だと思った。そしてそれは生徒間の中でもそうで、例えば学年を取っ払い、全学年混合でグループを組んで学ぶこともできるかもしれない。何を学びたいか、どんなプロジェクトに取り組みたいかといったことでグループを組んでもいいと思う。多様な人がまとまることで見えてくる光景があるのではないか。固定化されがちな関係性に緩みを生んでいく設計が大事だと思う。

（寺脇）

・ 大槌町や大槌高校は、震災後長い期間を経て変化してきた。その間、改革に反対していた人の意見も受け止めながら時間をかけて取り組みを進めてきたのだと思う。誰か１人が無理やり変えた訳ではなく、大槌町民自身がこの大槌高校をつくり上げてきた。今日は東京から大槌高校の卒業生も来場していたようだが、「自分がいた頃の大槌高校とは全然違う」ということを話していた。良く変わるということはとてもいいことだと思う。また来年もこの場で、高校生や次の世代の発表を聞いて住民みんなで学び合うという光景が見られることを願ってこの会を閉めたいと思う。ありがとうございました。

2　ワーキンググループにおける検討について

（1） カリキュラムWGにおける検討について

今年度は、「地域探究科の教育課程」「デュアルシステム」「社会教育の単位化」について検討した。

ア　地域探究科の教育課程について

昨年度まで検討された教育課程において、従来の「普通科」のように２年次から進路に応じて「文理コース（主に四大等進学)」と「教養コース（主に就職)」に分かれる形を廃し、科目選択の自由度を向上させ、生徒が自分の興味関心にあわせ選択できる授業を増やす方向が示されていた。

また、教員の持ち時数や教室のキャパシティー等、実際に運用する際の様々な問題を解決する必要があり、改めて検討が加えられた。

【WG の論点】

・デュアルシステム（大槌キャリアプログラム）の単位数について、６単位（金曜日の全ての時間を「デュアシステム」の授業）にするべき。

・セルフラーニングタイムの在り方について

・１単位の授業の在り方について

R6年度入学生の在学期間（3年間　2024～2026）の教育課程

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1学年［R6:2024］		現代の国語		言語文化		歴史総合		数学Ⅰ			数学A 個別最適数学α		科人		体育		保健	家庭基礎		情報Ⅰ		英コミⅠ			論・表Ⅰ（英語） 個別最適英語α		音美書Ⅰ		総探		LHR
2学年［R7：2025］	理系(物)	公共		地理総合		化学基礎		保健	体育		論理国語		論・表Ⅱ（英語）		物理基礎 生物基礎		数学Ⅱ					英コミⅡ			数学B		古典探究 音美書Ⅱ		総探		LHR
	理系(生)														ひょっこり（国語）																
	文系(日)																								日本史探究 (世界史探究)						
	文系(世)																														
	医療系														生物基礎										数学B						
	専門・公	公共		地理総合		化学基礎		保健			論理国語		ﾌｰﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ		ひょっこり		保健プラス		Eパス（英語） 個別最適英語β		簿記		情報処理		個別最適数学β						
	就　職												大槌キャリア・プログラム（OCP）～インターンシップ～																		
3学年［R8：2026］	理系(物)	体育			数学Ⅲ			数学C			論理国語		英コミⅡ			物理				化学				Oラボα（理科）		論・表Ⅱ（英語）		古典探究 音美書Ⅲ		総探	LHR
	理系(生)															生物															
	文系(日)				数学探究α			国語探究α								日本史探究				(倫理) 政治経済		くらしmath（数学）		まちづくり探究（社会）							
	文系(世)															(世界史探究)															
	医療系				数学探究β											理科探究															
	専門・公				Oラボβ（理科）			個別最適数学γ			論理国語		総合実践			ビジネス基礎		保育基礎		(倫理) 政治経済		ﾌｰﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ		保健プラス		国語探究β					
	就　職																	個別最適英語γ													

○授業の組み合わせが複雑すぎると、時間割の作成が困難になることが分かっていたため、選択の組み合わせを考慮しながら整理した。
○セルフラーニングタイムは、その運用の具体的方法について結論が出ず、また必要な教科科目を考えていくとその必要性がないことが分かってきたこともあり、実施は見送られることとなった。

イ　デュアルシステムについて

２年次にデュアルシステムを導入し、第１次産業から第３次産業までを体験するインターンシップを年４回実施する。また、地域と協働しての商品開発や販売、就職実践講座、年間の活動報告を企業関係者に対して行う計画について具体的な話し合いを進めた。今年度は兵庫県及び大阪府の先行事例を視察し、具体的な年間計画を立案すると同時に、大槌町産業振興課を窓口として受け入れ先となる町内の企業との連携の在り方と実施の細目について継続して検討している。

【先進校視察（訪問先とテーマ）】

①令和６年８月１日

大阪府立布施北高等学校･･･日本版デュアルシステムを実施して 10 年以上経過

テーマ：デュアルシステムの実際の運用とその課題について

②令和６年８月２日

兵庫県立御影高等学校･･･学校の魅力化を地元企業や NPO と連携して実施

テーマ：地域との連携について

【具体的計画の作成】

本校における検討に先進校視察の知見を加え、年間計画を作成した。また受け入れ企業に対する趣旨の説明や、実施の際の依頼事項などを冊子にまとめることとした。年間を通して４回の実習を行うこととし、地元の産業を理解し、職業に対する視野を広げる目的で、第１次産業から第３次産業までの全てを経験した上で、自分の希望する職場に向かうこととした。

デュアルシステム年間計画（例）※令和６年度ベースで作成したもの

授業カウント	月	日	イメージしている活動・やること
1	4	14	オリエンテーション、グループエンカウンター、産業について講演
2	4	21	就職試験についての基本知識、礼法指導、履歴書、対策問題
3	4	28	履歴書（清書まで）、電話のかけかた講座＆電話かけ
4	5	12	**インターンシップA－①** 一次産業実習
5	5	19	**インターンシップA－②**
6	5	26	お礼状、レポートまとめ、事業所からの評価を受けた面談、社会人講話or講演会、対策問題
7	6	2	履歴書（清書まで）、電話かけ、お礼状の下書き
8	6	16	**インターンシップB－①** 二次産業実習
9	6	30	**インターンシップB－②**
10	7	7	お礼状清書、レポートまとめ、事業所からの評価を受けた面談、社会人講話or講演会
11	7	14	イベントに向けた企画立案、対策問題
12	7	21	イベントに向けた企画立案会（外部の方々と一緒に行う）、夏休みの計画と打ち合わせ
13	8	18	夏休みの成果発表会、履歴書、電話かけ、お礼状の下書き
14	8	25	**インターンシップC－①** 三次産業実習
15	9	1	**インターンシップC－②**
16	9	15	お礼状清書、レポートまとめ、イベント準備
17	9	29	就職試験対策、イベント準備
18	10	6	就職試験対策、イベント準備
19	10	20	就職試験対策、イベント準備
20	10	27	履歴書（清書まで）、電話かけ、お礼状の下書き
21	11	17	**インターンシップD－①** 希望職種の実習
22	11	24	**インターンシップD－②**
23	12	1	お礼状清書、レポートまとめ、事業所からの評価を受けた面談、面接対策
24	12	15	求人票の見方、就職試験対策（面接・筆記）
25	1	12	就職試験対策（面接・筆記）
26	1	19	１年間のレポートまとめ、面接練習
27	1	26	**活動報告面接（最終評価）**、就職模試風なテスト
28	2	9	評価返却、次年度に向けた説明、準備
29	2	16	次年度に向けた説明・準備

【地元産業団体への訪問】

町内の産業をとりまとめる役割をもつ団体を訪問し、デュアルシステムの趣旨を説明するとともに、受け入れ先の企業への「つなぎ」を依頼することとした。その際、地元産業を知ることが将来のＵターンにつながる可能性についても説明し、地域で生徒を育てる視点について共有した。

○訪問先

・大槌町商工会　・大槌町役場（総務課）　・JA 花巻大槌支店
・釜石地森森林組合　・大槌消防署　・大槌商業開発
・大槌町観光交流協会新　・おおつち漁業協同組合　（年間計画表を入れる）

ウ　社会教育の単位化

震災後から活動している「復興研究会」での活動、東京大学大気海洋研究所と連携した「はま研究会」での活動、地域行事のボランティア活動への参加等、生徒の社会教育での学びを高校生活における重要な学びとして単位化することについて、令和６年度にＷＧで具体的な方策等を継続して検討した。

【WG 内の論点】

・単位認定の時期、方法
・社会教育科目の単位化の目的とは何か
・活動記録をどのように取るのか
・持続可能な運営体制
・引率等の考え方はどのようにするのか

特に認定の時期や方法について、誰がどのように認定するのか明確にする必要があることについて話し合われた。また、ボランティア活動等を行う場合、単位取得が目的となってしまうケースが考えられるなどの議論がなされた。

【今後の課題】

生徒の在学中の活動が職員間で共有されず、また生徒自身も自らの多様な活動を有機的に結びつけられていないことが課題として挙げられている。このことから、まずは生徒自身が自分の多岐にわたる地域での学びや探究活動等で触れる機会のあった様々な活動をポートフォリオ化して整理する必要性について検討が進んでいる。誰が、どこで、どのような活動をしているのか、現状を把握することとし、次にどのような活動を単位として認めていくか、整理していくこととなった。

（２）ＤＸ等教育方法検討ＷＧにおける検討について

今年度５月から、個別最適数学と英語の授業が１年生で開始された。本 WG では、この授業の在り方を考え、また「個別最適な学び」と ICT 教材の関係性について検討した。より充実した授業を目指し、数学科と英語科間での互見授業を始め、他教科の先生にも参観してもらい、実態の把握や授業について様々な視点からご意見をいただいた。また、WG 内で具体的な授業展開や教材、評価方法を検討する中であがった様々な課題について、検討・協議会を数回実施した。その結果を受けて、授業方法や評価に関するグループと動機付けに関するグループに分かれて検討している。

ア　個別最適授業の考え方と課題

昨年度の議論を踏まえ、今年度は ICT 教材を使用せずに進めることとなった。生徒も職員も手探りで始まったが、「自分のペースで出来る」「先生に質問しやすい」雰囲気を作ることに成功し、生徒は授業に対して熱心に取り組む姿勢が見られた。9 月頃までは数学では学び直しのドリル、英語では基本的な単語と文法に取り組んだが、授業のはじめに一人ひとりの目標を設定させ、おわりには振り返りを行い、次のステップへの見通しを持たせる取り組みを継続した。このような取り組みにより、生徒はより意欲的に学習に取り組むようになった。

一方で９月以降は、学習が進むにしたがって生徒ごとの進度の差が明確になり始め、教員の手が回らない時間が多くなり、時間をもてあます生徒も散見されるようになってきた。

イ　ICT 教材の検討

今年度前半の、教員の伴走を重視した個別最適学習の実績を活かし、教員の「声かけ」は行いつつも、各自のペースで進めることの出来る ICT を導入したカリキュラムの構築に向けて、 DXWG と数学科、英語科が連携し、実際に使用しながら数種類の ICT 教材を比較、検討する WG を複数回開催した。ドリルだけ、また ICT 教材だけにならないようにバランスを取りながら授業を展開する方針で検討が進んだ。業者も招いて活用方法についての研修を行い、また試験的に ICT 教材を使用しながら次年度からの授業展開について検討した。

ウ　研修の実施

12 月には、本校運営指導委員会で岩手大学教育学部の久坂哲也氏（「メタ認知」や「動機づけ」などに関する領域が専門）を講師にお招きし、現状の個別最適数学と英語の授業を参観後、研究協議会にて助言・指導をいただいた。内発的動機付けに結びつけるためにも、良い学習集団を作ることが重要であり、自己効力感を持たせるように、例えば以前の自分と現在の自分を比較できるシートを作成することの有効性と、つまずきがどこから始まっているのか、丁寧に解きほぐしていくことが重要であることを学んだ。

エ　今後に向けて

次年度は ICT 教材を本格的に導入することになるため、具体的な活用方法について引き続き検討していくことになる。そのなかでも重要となるのは評価の方法と観点である。ICT 教材を導入するからこそ、教員の伴走のなかで、生徒の成長を見取り、適切に評価することが生徒の自己効力感と自己調整力を高め、自走できる学習者に成長させることが出来ると考えられる。

（３）周知・広報ＷＧにおける検討について

本 WG では、令和６年度から始まった地域探究科に関する情報及び本校の探究活動の成果や取り組み状況を中学生や保護者、地域住民に周知するための取組を実施した。

ア　近隣中学校への学校説明会の開催

昨年度から近隣８中学校の主催する学校説明会に参加したが、今年度も同様に参加した。他校は副校長や教務主任等比較的年齢層の高い職員が説明をするが、普段の授業の雰囲気と探究活動の取り組みについて伝えるために、教諭と魅力化推進員の２人組で説明を行った。初めて参加する職員は事前に内容や話し方の確認を行うなど、学校としても力を入れた。

【学校説明会日程】

	期日	中学校
1	6月 26 日(水)	唐丹中学校
2	6月 28 日(金)	釜石東中学校
3	6月 28 日(金)	甲子中学校
4	7月3日(水)	山田中学校
5	7月3日(水)	大平中学校
6	7月9日(火)	吉里吉里中学校
7	7月 10 日(木)	大槌学園
8	7月 16 日(火)	釜石中学校

イ　文化祭及び地域での探究活動展示

以下の日程で、探究活動の紹介や成果、高校の取組の様子を町内の施設等に展示し、地域住民に本校の特徴ある取組を周知した。生徒一人ひとりの顔が見える展示を行ったことで保護者や地域住民からの注目も高く、生徒の取組状況を見てもらうことができた。

［校内展示企画］

・10 月 19 日（土）：文化祭当日に実施

［第１回展示企画］

・２月 17 日（月）～２月 19 日（水）：シーサイドタウンマスト１階センターコート

・２月 19 日（水）～２月 22 日（土）：大槌町文化交流センターエントランス

３年生「18 年間で身に付けた“大槌(ハンマー)”」の活動まとめポスターを展示

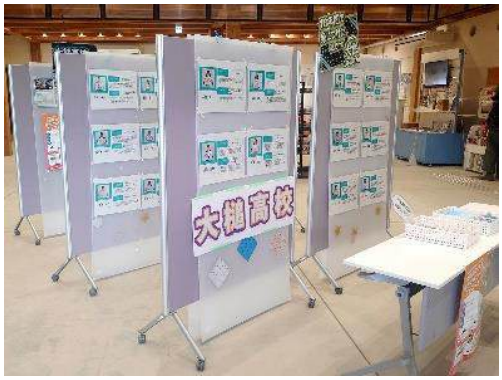
［その他展示］

・11 月７日（木）～11 月８日（金）：盛岡市民文化ホール

第 33 回全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会

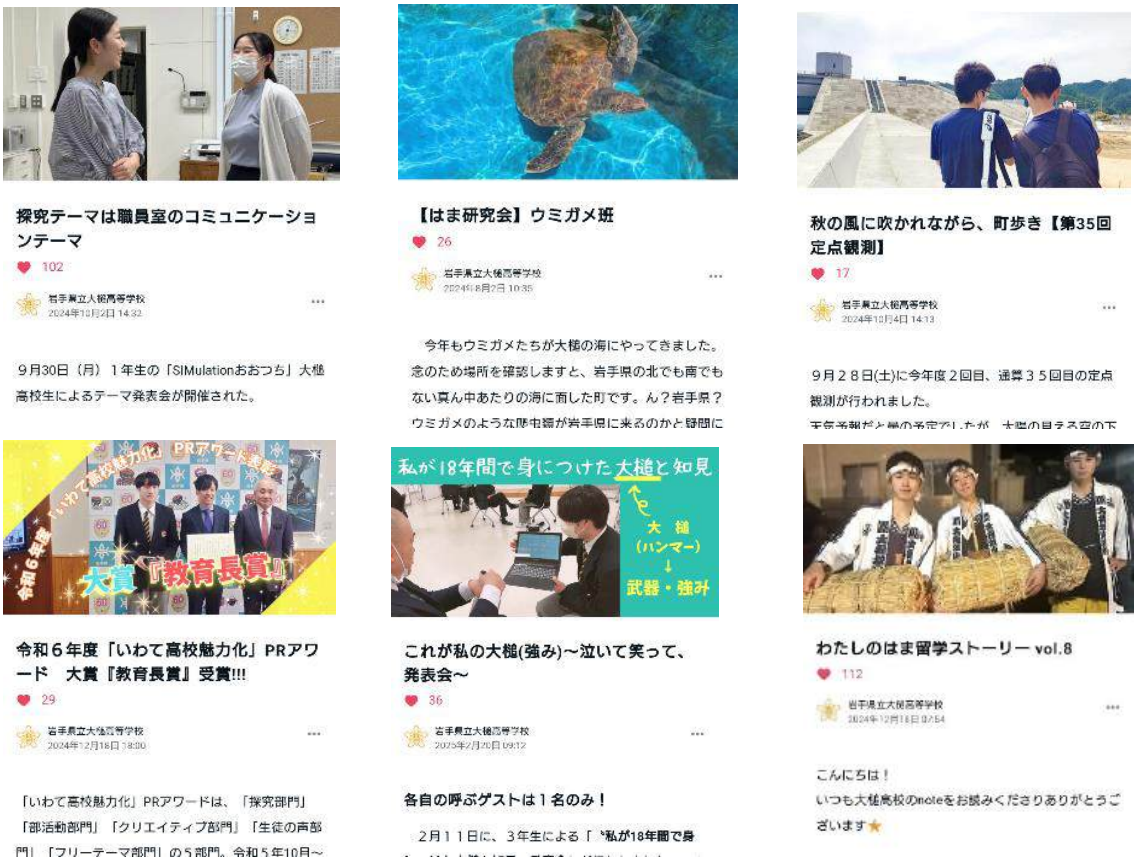
第 31 回東北小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会

第 10 回岩手県生活科・総合的な学習教育研究会　令和６年度　岩手・盛岡大会



ウ　note 等を活用した情報発信

今年度も継続して生徒の学校生活や学校行事の様子、生徒によるイベントのお知らせ等、合計 90 本(３月３日現在)の記事を投稿した。また、今年は県外留学生一人一人にスポットを当てた記事を発信し、岩手県高校魅力化ＰＲアワードで大賞を受賞した。担当者以外にも多くの職員が執筆を担当したことが、バラエティー豊かな発信につながっている。



エ　地域に開かれた「探究発表会」の実施

２月 22 日（土）に、大槌町文化交流センターおしゃっちにて、１・２年生の探究学習の成果発表会を実施した。町内から約 75 名、県内・県外から高校生や教職員、探究活動のコーディネーターや教育関係者等約 78 名の来場があり、多くの方に生徒の成長を直接感じてもらう機会となった。

【第１部】　１年生「大槌町の課題解決アイデア発表会」
【第２部】　２年生「マイプロジェクト活動成果発表会」
【第３部】　研究協議会 パネルディスカッション
テーマ：「大槌に必要なこれからの探究とは？」
登壇者：寺脇 研氏（映画評論家・京都芸術大学客員教授）
田村 正資氏（株式会社 baton(QuizKnock)新規事業開発/哲学研究者）
コーディネーター１名・生徒２名

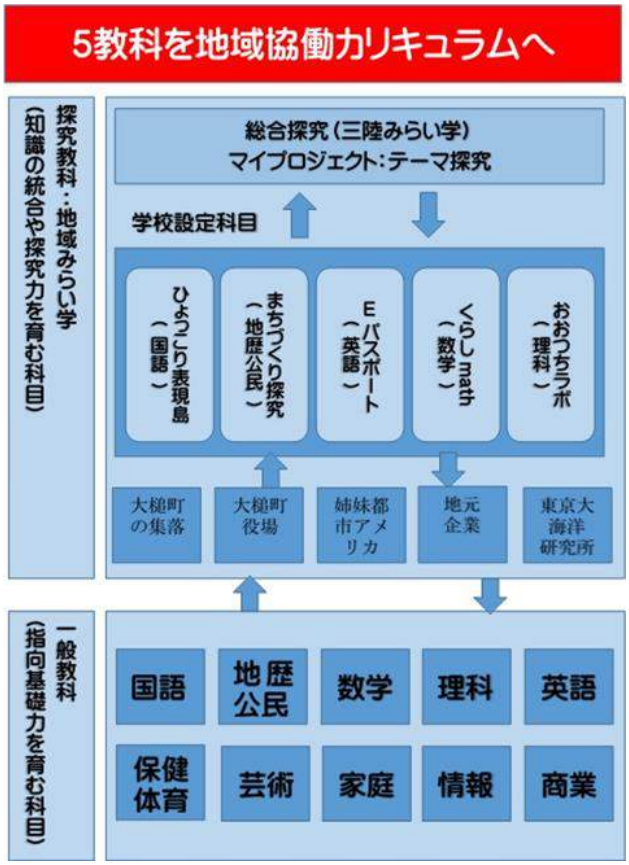
オ　今年度の成果・課題と次年度以降の方向性

・　本校の取り組みが県内外から注目されるようになってきており、学校視察や探究発表会の参加者、また「はま留学」を希望する生徒等からはnoteでの発信について評価いただくことが多くなった。今後は地域の中学生などにも訴求するような発信を考えていくことが課題である。

・　今年度、学校評価アンケートにおいても、特に保護者の学校に対する肯定的な回答が多くなっているが、noteの発信により学校の取り組みや生徒の状況がより見えやすくなったことが功を奏している可能性が高い。今後とも生徒の実績や行事の状況の発信のみならず、生徒や職員の「想い」が伝わるような発信を心がけていきたい。

３　本校の特徴的な教科・科目

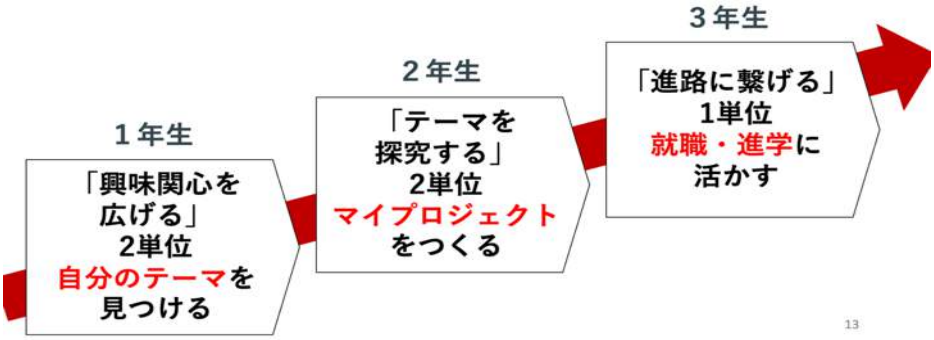
本校では、「総合的な探究の時間」を地域協働カリキュラムの核と位置づけ、地域をフィールドにした探究的な学びを推進している。さらに、生徒の資質・能力の育成のために各教科・科目と総合的な探究の時間を相互に関連させ、教科横断的な学習を実現することと、就職を中心とするコースの生徒に対して、これまで通りの授業でよいのかという疑問点から、より探究的な学びを実践する学校設定教科「地域みらい学」を設定している。これらは、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語のそれぞれが探究的な学びを実践する、「ひょっこり表現島」、「まちづくり探究」、「くらし math」、「おおつちラボ」、「Ｅパスポート」を設定し、地域協働カリキュラムとして令和３年度から実施を開始した。



◇各科目の実施状況◇

（１）総合的な探究の時間

三陸地域の復興を担うリーダーを育成することを目指し、３年間を通して身の回りや地域の課題を解決する力を身に付けることを目標としている。同科目では、大槌町というフィールドを題材に、地域課題の発見・解決に向けた活動を実施した。東日本大震災を経験した大槌町を題材にすることで、生徒は複雑多様な地域の事情や住民感情の揺れ等に触れることになる。そのような状況から、自分自身を見つめ、理想の姿を描き、それを実現するための実践を行った。この学びを通して、地域を創る側の視点を持って社会参画する意欲と力を涵養するとともに、今後ますます不確実性の高まる未来を生きていく力を育むことを目指した。大槌町においては、震災後の生活基盤の復旧は完成を迎えている。今後は高校生が社会の構成員として主体的な意志をもち、理想の姿に向かい行動を起こすことも復興の姿そのものとなる。「総合的な探究の時間」では、そうした地域におけるロールモデルの基盤となる資質・能力の育成を目指した。３年間を見通した流れは以下の図の通りである。



１年生では「興味関心を広げる」をテーマに、自分紹介プレゼンテーションや町内外の大人による人生講話、大槌町の課題に対する解決案の構想し、行政や議会に提案を行う活動等に取り組んだ。自分自身に目を向けるところから徐々に視点を社会へ広げ、町内・町外の具体的な取組を知り、課題解決を体験的に学ぶ機会を設定している。

２年生では「テーマを探究する」をテーマに、自ら設定したテーマでプロジェクトを企画し、地域をフィールドとして実践しながら探究を進める「マイプロジェクト」に取り組んだ。各自の興味・関心から問いを設定し、他者や地域を巻き込みながら問いの検証を繰り返すことで、実践的な探究活動を目指している。

３年生では「進路に繋げる」をテーマに、大学・短大進学を目指す文理コースでは進路志望に関連したテーマでの探究活動、専門学校・就職を目指す「教養コース」では就きたい職業の未来を考える活動を実施した。また、18 年間で得た強みや知見を語るプレゼンテーション活動を通して、これまでの学びを総括した。

ア　１年生の取り組み

１年生では自分と社会に目を向けながら心が動くテーマを探すことを目標に、自分紹介プレゼンテーションや、町内外のゲストによる人生講話、大槌町役場へのヒアリングや町外視察を通して大槌町の地域課題解決に向けた提案を行う活動に取り組んでいる。２年生で行うマイプロジェクト探究活動に向けた下地作りの時期と位置付け、生き方・考え方を見つめ直し、自分と地域社会課題との関わりを考える機会を繰り返し設定している。

（ア）大槌発未来塾（５月）

「大槌発未来塾」とは、町内外や多様な年代の方々との交流や価値観の触れ合いを通して、自らの生き方・考え方を見つめ、今後の進路・自らの未来を考えていくための材料とすることを目的とした企画である。１学期、総合的な探究の時間では自分と向き合うことを通じて、自分の興味関心を探るという活動を行ってきた。さらにその学習を進めるために、高校生のロールモデルとなりうる地域内外の大人を招いて話を聞く機会を設けた。

◆概要

日　時：令和６年５月 28 日（火）５・６校時（１、２年生対象）

場　所：大槌高校 各教室

テーマ：「自らのテーマをもち、身の回りの課題解決に取り組むチャレンジャーと出会う」

対　象：１、２年生

日　程：

開始	終了	所要	内容
13:20	13:30	10	［移動］ ・１ターム目の発表教室に移動 ・投影スライド等の接続確認
13:30	14:20	50	［ゲストとの対話①］ ・開会挨拶（10 分） ・ゲストによるプレゼンテーション（25 分） ・「探究はなぜ大切なのか」をグループで対話（10 分）
14:20	14:30	10	休憩・移動（次に聞くゲストの教室へ）
14:30	15:20	50	［ゲストとの対話②］ ・開会挨拶（10 分） ・ゲストによるプレゼンテーション（25 分） ・「探究はなぜ大切なのか」をグループで対話（10 分）

◆講師

	氏名	所属
1	千葉 絢子 氏	元岩手県議会議員
2	太田 未彩希 氏	認定こども園　みどり幼稚園
3	Nao 氏	Pilates Studio 紫苑
4	芳賀 諒太 氏	大槌町 産業振興課 一次産業活性化係
5	小国 琢 氏	大槌町 教育委員会事務局 学務課
6	小國 夢夏 氏	一般社団法人大槌町観光交流協会
7	川崎 杏樹 氏	株式会社かまいし DMC
8	吉田 美涼 氏	IBC 岩手放送 報道部
9	古畑 歳景 氏	認定 NPO 法人カタリバ
10	吉田 誠 氏	宇宙航空研究開発機構（JAXA）

◆当日の様子

生徒は町内外から集まった 10 名の社会人のうち２名を選び、小グループでお話を聞いた。講師のみなさんからは、自身が取り組んでいる分野についてのお話しだけでなく、これまでの人生の中での悩み、葛藤やなぜ探究をする必要があるのかを丁寧にお話いただき、生徒たちが多様な生き方に触れ、価値観が広がる機会となった。

◆生徒の感想

・自分は、社会に出る事が苦手だと思っていましたが、今日話を聞いて一つの情報だけで判断しない事など常に失敗してもまたチャレンジし続ける事を学ぶ事が出来ました。

・何か分からないけど不安って時は、少しでも気になったこと興味を持ったこと、何でもいいからとりあえずやってみるといつか繋がることがあるかもしれないから、やってみるのが良いということを学びました。

（ア）自分プレゼン（４月～７月）

総合的な探究の時間を始めるにあたって、自己発見・自己理解を深めることを目的に、自分自身をプレゼンテーションする「自分プレゼン」の作成に取り組んだ。また、「自分プレゼン」を町内の中学３年生に行うことで、より深い理解につなげることを目指した。昨年度に引き続き、大槌学園・吉里吉里学園が合同で大槌高校に集まり、対面での発表会を実施した。

◆授業の流れ

回数	日程	内容
1	４月 10 日（水）	オリエンテーション
2	４月 17 日（水）	学びに向かう関係性づくり
3	４月 24 日（水）	自分グラフを使っての自己理解
4	５月 15 日（水）	ストーリーシートの作成
5	５月 22 日（水）	ストーリーシートを深め合う
6	５月 28 日（火）	大槌発未来塾
7	６月　５日（水）	自分プレゼンをつくる①
8	６月 12 日（水）	自分プレゼンをつくる②
9	６月 26 日（水）	自分プレゼンリハーサル
10	７月　４日（木）	自分プレゼン発表会

◆オリエンテーション・学びに向かう関係性づくり

オリエンテーションでは、総合的な探究の時間の年間を通した目的と流れを説明し、自らの意志を持ち主体的に行動することへの意識づけを行った。また授業全体を通してお互いの意見や考えを交流させる機会が多いため、心理的安心のある関係性づくりのためアイスブレイクを実施した。

◆自分プレゼンの作成

今年度は、「なぜ私は大槌高校に入学したのか、そしてどんな高校生活を送りたいのか」をテーマにプレゼンテーションを作成。15 年間の人生を振り返るにあたって、最初に学年の教職員が自分たちの歩んできた人生について発表した。また、作成中には、お互いのプレゼンテーションの内容を深めるため、生徒同士でお互いの考えに問いかけを行い深め合う活動も実施。最終的にはスケッチブックに清書し、紙芝居形式で５分程度のプレゼンテーションが完成した。

【生徒の感想】

・最初はとても緊張しましたが、９年生の皆さんが真剣に聞いてくれて、また、積極的に質問をしてくれたので、楽しく発表をすることができました。今回の発表会を機に、大槌高校に来てくれる人が増えたらなと思います。

・自分プレゼンの内容を作成していくことで、これまで自分がどんな人生だったのか、どんな考えをもっていたのかを振り返ることができてよかったです。また、それが中学生のためにもなったので、嬉しかったです。

（ウ）SIMulation おおつち

SIMulation おおつちとは、大槌町にある地域課題を知り、解決策を構想する活動を通して、地域社会に対する視野を広げるとともに課題解決のための力を養うための活動である。大槌高校生が大槌町の魅力向上や課題解決に向けたアイデアを構想し、大槌町議会、行政、町民に対して提案を行った。

学習は以下の順で行った。

a　町内の現状を調査する。
b　現状調査をもとに、テーマ設定をする。
c　設定したテーマについて町議会や町役場に発表する。
d　町外を視察し、各テーマに対する解決策の先進事例を学ぶ（ラーニングジャーニー）
e　課題が生まれている原因を探り、解決策を構想する
f　解決策が実現可能か検証する（町内フィールドワーク）
g　大槌町議会議場にて、構想した解決策を議員向けに発表
h　大槌町の課題解決アイデア発表会にて、構想した解決策を地域住民向けに発表

◆授業の流れ

No	日程	内容
1	８月 28 日(水)	オリエンテーション
2	９月　４日(水)	夏休みの課題の共有
3	９月 12 日(木) ９月 18 日(水) ９月 24 日(水)	現状調査、テーマ発表会に向けた準備
4	９月 30 日(月)	大槌町議会、大槌町役場へテーマ発表
5	10 月　９日(水)	テーマ発表会振り返り
6	10 月 23 日(水) 10 月 30 日(水)	課題解決アイディアの構想
7 8	11 月　６日(水) 11 月 13 日(火)	ラーニングジャーニー事前学習 （視察先に関する調べ学習、質問出し）
9	11 月 18 日(火)	ラーニングジャーニー（町外視察）
10	11 月 20 日(火) 11 月 27 日(火)	ラーニングジャーニー振り返り
11	12 月 18 日(火)	中間発表会
12	12 月～１月	課題の検討、課題解決アイデアの構想、検証
13 14	１月 30 日(火) ２月 12 日(水)	発表に向けた資料作成、発表練習
15	２月 17 日(月)	議場発表会 （グループごとに構想したアイデアについて大槌町議会議員に発表）
16	２月 21 日(金)	発表修正、発表練習
17	２月 22 日（土）	課題解決アイデア発表会 （グループごとに構想したアイデアについて地域住民に発表）

◆ テーマ発表会

昨年度までは大槌町議会からテーマを示していただいていたが、より主体的に取り組むことを目指し、今年度は大槌高校生がグループごとに議論しながら自分たちでテーマを設定することとした。当日は生徒発表に対して、大槌町議員や大槌町役場職員から感想や講評、アドバイスをいただく場を設けた。

【テーマ一覧】

分　野	テーマ
教育・福祉	①　大槌町の学習意欲の高い中高生がその意欲を維持・向上するために必要な施策は何か
	②　大槌町の高齢者が本当に求めている福祉サービスとは何か
産業振興	①　大槌町のＩターン者を増やすための効果的な施策は何か
	②　大槌町の自然環境に左右されない特産品の開発
防災・震災伝承	①　震災を経験していない世代が担う震災伝承の在り方とは何か
	②　災害時の犠牲者を0にするために必要な避難の在り方とは何か
地域コミュニティ	①　大槌町の公民館や集会所を活かした多世代の交流を生むための施策は何か
	②　大槌町の若者の地域コミュニティへの参加率を高めるための施策は何か
環境保全	①　大槌町の野生鳥獣被害を減らすための施策は何か
	②　大槌町の海ゴミを減らすための施策は何か

◆町外視察（ラーニングジャーニー）

各テーマに関する課題解決のための先進的な事例を学ぶために、大槌町外の自治体や民間団体を訪問し、調査活動を実施した。最終的に町への提案アイデアを考えるにあたり、大槌町に活かせる知見を持ち帰ることを目指した。また、ラーニングジャーニー時点での解決策の仮説を用意して訪問し、訪問先でフィードバックもいただいた。訪問するエリアは、いずれも各テーマに対して先進的な取組を行っている、葛巻町、宮古市、盛岡市、滝沢市、気仙沼市とした。

【訪問先】

	テーマ	視察先
1	大槌町の学習意欲の高い中高生がその意欲を維持・向上するために必要な施策は何か	・葛巻町学習塾（葛巻町）
2	大槌町の高齢者が本当に求めている福祉サービスとは何か	・陸前高田市役所地域包括センター ・陸前高田市社会福祉協議会
3	大槌町のＩターン者を増やすための効果的な施策は何か	・NPO 法人みやっこベース（宮古市）
4	大槌町の自然環境に左右されない特産品の開発	・株式会社シャイン（大船渡市）
5	震災を経験していない世代が担う震災伝承の在り方とは何か	・岩手県立図書館
6	災害時の犠牲者を０にするために必要な避難の在り方とは何か	

7	大槌町の公民館や集会所を活かした多世代の交流を生むための施策は何か	・滝沢市役所 ・法誓寺自治会（滝沢市） ・古舘公民館（紫波町）
8	大槌町の若者の地域コミュニティへの参加率を高めるための施策は何か	
9	大槌町の野生鳥獣被害を減らすための施策何か	・amu 株式会社（宮城県気仙沼市）
10	大槌町の海ゴミを減らすための施策は何か	

◆構想案の検証（町内フィールドワーク）

町外視察で頂いたアドバイスをもとに、解決アイディアを再構想した。その案が実現可能であるかどうかの検証を町内で実施した。

	テーマ	検証
1	大槌町の学習意欲の高い中高生がその意欲を維持・向上するために必要な施策は何か	・コラボスクール大槌臨学舎で高校生へのヒアリング実施
2	大槌町の高齢者が本当に求めている福祉サービスとは何か	・町内の高齢者サービスを提供している施設へアンケート調査
3	大槌町のＩターン者を増やすための効果的な施策は何か	・町民カードの作成のためのインタビュー
4	大槌町の自然環境に左右されない特産品の開発	・町内で集めた廃棄野菜を粉末状にし、だしの試作
5	震災を経験していない世代が担う震災伝承の在り方とは何か	・震災経験者と未経験者が生成 AI を活用し震災経験を語るイベントの開催
6	災害時の犠牲者を０にするために必要な避難の在り方とは何か	・避難意識を高めるために VR を活用した教材を作成し、経験していただいた町民の方にヒアリング

7	大槌町の公民館や集会所を活かした多世代の交流を生むための施策は何か	・多世代が交流できるようなイベントの内容を考え、実際に町内の公民館で実施
8	大槌町の若者の地域コミュニティへの参加率を高めるための施策は何か	・若者の地域コミュニティの参加率を高めるため、イベント内容や集客を工夫し、実際に町内の公民館でイベントの実施
9	大槌町の野生鳥獣被害を減らすための施策何か	・森林整備に興味をもってもらうため木材を使ったイベントの実施
10	大槌町の海ゴミを減らすための施策は何か	・漁網を再利用できないかについて漁師の方へプレゼン、ヒアリング

◆議場発表会概要

日　時：令和７年２月 17 日（月）10：00～12：00、13:30～15:00 の二部制

場　所：大槌町議会 議場

【当日の流れ】

（午前の部）

10：00～10：04　開会・代表生徒あいさつ

10：04～10：38　テーマ①に対する提案Ａ・Ｂ

10：38～10：55　テーマ②に対する提案Ａ

10：55～11：05　休憩

11：05～11：22　テーマ②に対する提案Ｂ

11：22～11：56　テーマ③に対する提案Ａ・Ｂ

11：56～12：00　閉会・町長総括

（午後の部）

13：30～13：34　開会・代表生徒あいさつ

13：34～14：08　テーマ①に対する提案Ａ・Ｂ

14：08～14：18　休憩

14：18～14：52　テーマ②に対する提案Ａ

15：52～15：00　閉会・教育長総括

【当日の様子】

これまでのフィールドワーク等で学んだこと及び構想した解決策のアイデアの提案を、PowerPoint にまとめて 10 分程度で発表した。議員の方々から、実現可能性も含めた質問や感想をいただいた。

◆大槌町の課題解決アイデア発表会にて、構想した解決策を地域住民向けに発表

各チームが構想した解決策のアイデアを、地域住民やラーニングジャーニーでお世話になった方々に対して発表した。

【発表会概要】

日　時：令和７年２月 22 日（土）10：20～12：05

場　所：大槌町文化交流センター おしゃっち

テーマ：「大槌町の地域課題に対する解決策のアイデアを発表する」

【当日の流れ】

10：20～10：45　発表ターン１　※３会場に分かれて実施

10：45～11：10　発表ターン２　※３会場に分かれて実施

11：10～11：35　発表ターン３　※３会場に分かれて実施

11：35～12：05　発表ターン４　※４会場に分かれて実施

【当日の様子】

議場発表会でいただいたフィードバックを反映させて、発表を行った。多くの地域住民から生徒たちの解決アイデアに対する感想や質問をいただいた。

◆SIMulation おおつち全体に対しての生徒の感想

・私は震災伝承を探究していて、発表が終わって解散になった時に、小中学校の時の先生から結構重いテーマだったけど大丈夫？と聞かれました。精神的な負担が大きくて心配だから大人と一緒に考えながら、今後とも続けてほしいとコメントをいただきました。その時に今私たちが探究しているテーマは本当に難しいことで、もっと深掘りしていくうちに身内に亡くなった人がいる方など、リアルな経験を聞ける分、気持ちが落ち込んだりしそうだなと思いました。でも、震災を経験した人が生きている時間は有限なので、より多くの方が「震災でこんなことがあったんだよ」と話してくれることでリアルに感じることができるので、いろいろな話が受け継がれていってほしいと思いました。

・自分達の発表を聞いてもらったたくさんの人から感想をもらってはじめて自分達の行っていた活動はこんなに凄い活動なのだ、という事が分かりました。また自分達で理想の伝承の状態などを深く考えた意味があったと思いました。話を聞いてもらい一緒に学ぶ事が出来たので良かったです。

・自分たちが発表を通して伝えたかったこと、リサイクルを活用し、環境に優しいという PR も可能ということが来場者の方々にしっかりと伝わっており、安堵感を覚えたのと同時にとても嬉しかったです。そして伝わったうえで来場者の方がから、これからも頑張って欲しいや楽しみにしているなどのコメントをいくつかいただきました。僕は２年生になったら行うマイプロジェクトでも sim 大槌と同じように海洋プラスチックごみに関して取り組んでいきたいなと考えています。そのため、それを進めていくにあたって今回自分たちが行ってきた成果や､おしゃっちや議会で発表したときにいただいた意見はとても貴重です。sim おおつちで学んだことを無駄にせずこれからの総合探究の時間の授業も頑張りたいです。

・発表を見に来てくれた方々の中から、自分たちが考えた VR やカードゲームの作成は、防災に参加しない避難訓練というのがとても面白いと思うという感想をいただいて、うれしいという気持ちと、これだけ評価してもらえたことはすごいことだと改めた感じました。そして、これだけじゃなくて、これからも防災について考えていかなければいけないと思いました。様々な人達が紡いできたものを、僕達が紡いでいこうと思いました。

・自分たちの活動にたくさんの方がすごいと言ってくださったり、販売を楽しみにしているよと言ってくださったりと、こんなにお褒めの言葉をいただけると思っていなくてとても驚きました。また、活動を通してたくさんの方の協力、アドバイスがあったからこそ自分たちも頑張ろうという気持ちで取り組むことができたと思いました。今後、今回の活動を続けていくか分からないけどたくさんの方に期待されている中、今回の活動だけで終わらせていいのかと思いました。

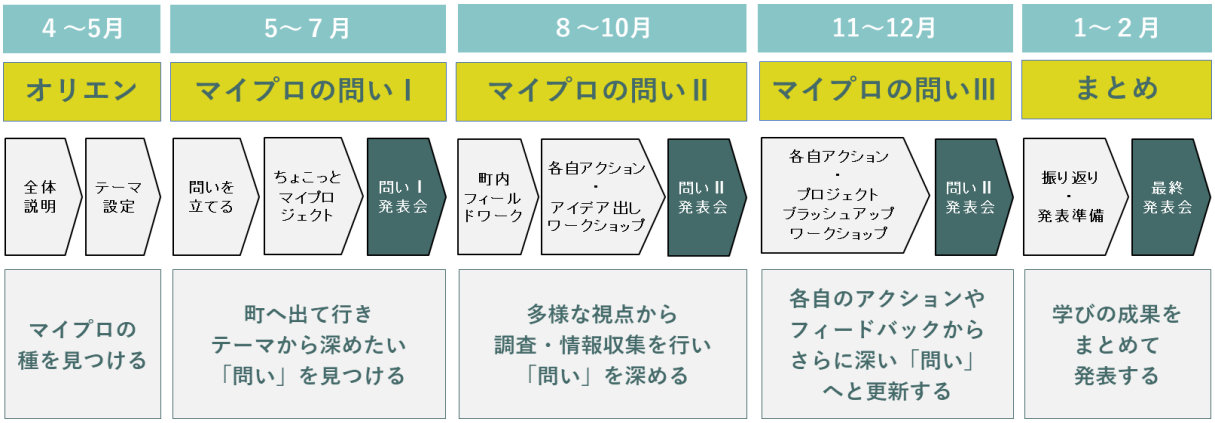
イ　２年生の取り組み

２年生では、生徒各自が興味関心から取り組みたいテーマを設定し、問いを立てながら検証アクションを繰り返していく「マイプロジェクト」に取り組んだ。

４、５月は、自分の興味や身の回りの気になることを模索しながら、個人でテーマを設定した。６月からは、各自のテーマに関する問いを立て、検証アクションを実行した。９月にはフィールドワークを行い、生徒のテーマに関連する地域の方からの協力を得ながら活動を実施した。

９月以降は、生徒や教員が４つのゼミに分かれて、個々で進めるプロジェクトを共有・相談するコミュニティをつくりながら授業を展開した。また、オンラインを活用し他県の高校生とお互いの探究の進捗状況を共有し合うオンライン探究交流会（６月、10 月、１月）や、地域の集会所や公民館などの６か所での中間発表会（11 月）、地域での最終発表会（２月）も実施し、自身の学びを振り返り、他者に向けて発表する機会を定期的に設定した。プロジェクト活動の指導にあたり、認定ＮＰＯ法人カタリバのスタッフ１名に協力をいただいた。

１年間を通した授業の流れは以下の通りである。１回の調べ学習だけで活動を終わらせずに、年間を通して問いを更新し続けることを目的としてカリキュラムを設計した。



（ア）テーマ設定（４月）

◆気になること探しワーク・テーマの設定

自分の過去の経験から印象に残った出来事を振り返ったり、新聞や広報誌を見て気になる記事を探したりしながら、テーマに繋がりそうな「ワクワク」と「モヤモヤ」のキーワードを書き出した。そのワクワクとモヤモヤを掛け合わせ、自分がやってみたいプロジェクトを個人で設定した。

（イ）マイプロジェクトの問いⅠ（５月～７月）

◆「ワクワク」×「モヤモヤ」から、ちょこっとマイプロを実行しよう

自分が「ワクワク」することで身近な「モヤモヤ」を解決できるような問いを設定した。その問いを検証するために、１週間程度で実行できるアクション（ちょこっとマイプロ）を計画し各自がアクションを実行した。また、その成果をポスターにまとめ、伝え合う場を設けた。

【生徒のちょこっとマイプロの例】

・誹謗中傷をなくせるようなイラストを描く

・郷土料理を組み合わせたパンを作る

・コミュニケーション力を上げるため、初対面の人と話してみる

・大槌町の活気に関する大槌高校生へのアンケート調査

◆第１回オンライン探究連携授業（６月２５日）

小規模校３校がオンラインで集まり、互いの探究活動を共有しながら学びを深めていく「オンライン探究交流会」を実施した。本校では新型コロナウイルス感染症による休校が重なってしまったため、自宅から参加できた生徒 15 名のみの参加となった。当日は北海道鹿追高等学校の生徒 30 名、山形県立新庄南高等学校 金山校の生徒 16 名、静岡県立川根高等学校の生徒 32 名、鳥取県立青谷高等学校の生徒９名が参加し、オンラインビデオ通話を活用して交流した。

１回目の交流会では、**「オンラインコミュニケーションにおける基本的な作法を学ぶとともに、自らの興味関心を他校の生徒に発表し、質問やコメント等を交わしながら、今後の探究活動におけるアクションをより具体化させる」**ことを目指し、各校の紹介や生徒同士のアイスブレイクなどを行った。

◆夏休み中のアクション計画（７月）

「今の自分にはすぐにできない」アクションをすることを目標として、アクションを計画。問いの設定や情報収集、計画立てなどそれぞれの状況に応じた講座を実施し、不安点を払しょくした。また、夏休みの地域活動をリストアップして配布し、アクションの場として活用することも促した。

（ウ）マイプロジェクトの問いⅡ（８月～11 月）

◆マイプロジェクト・フィールドワーク（９月３日）

各自の探究活動を進めていくにあたり、各テーマに精通した地域の大人と出会うことを目的として「マイプロジェクト・フィールドワーク」を実施した。

生徒のテーマから 23 ヶ所の訪問先及び講師を設定し、生徒たちが各講師のもとに出向いて、プロジェクトの進め方や今後の方向性などについて相談をした。また、遠方の講師については、オンラインで実施した。

【テーマ・講師一覧】

No	テーマ	講師名（所属）★はオンライン参加
1	心理	南 景元氏　（大槌町スクールソーシャルワーカー）
2	地域活性・復興	小笠原 佑樹氏　（大槌町協働地域づくり推進課）
3	地域活性	三浦 文雄氏　（沢山地区自治会長）
4	絵・イラスト	内海 沙樹氏　（design hmm）
5	美容	加藤 真美氏（beauty salon Make Over）
6	難聴	越田 氏　（大槌町健康福祉課）
7	発達障害・料理	東梅 麻奈美氏　（地域共生ホームねまれや）
8	料理・魚	藤原 知佳子氏
9	消防・防災	島村 亜紀子氏（大槌町防災対策課）
10	保育	八木澤 弓美子氏　（おおつちこども園）
11	読書	岡野 治子氏（大槌町立図書館）
12	動物	藤原 紅葉氏　（わんにゃん美容室じゅのむ）
13	動物	佐々木 義男氏（和牛繁殖農家）
14	看護	看護師の皆様　（植田医院）
15	起業・スポーツ	佐藤 陸氏　（トレーニングジム KING8）
16	音楽・文化	臺 隆明氏　（槌音プロジェクト）

17	広報・ＰＲ	木下 未来氏　（一般社団法人おらが大槌夢広場）
18	高齢者・介護	芳賀 博典氏　（吉里吉里公民館）
19	歯	佐々木 憲一郎氏　（ささき歯科医院）
20	コミュニケーション	★吉井 伶衣氏　（The University of Melbourne、カタリバ online for teens）
21	ゲーム・IT	★上田 敏孝氏　（株式会社 DAO、一般社団法人地方 WEB3 連携協会 代表理事、情報経営イノベーション専門職大学 客員教授）
22	誹謗中傷	★千葉 絢子氏
23	その他	★髙橋 倫平氏（一般社団法人まちとこ）

◆ゼミ活動

フィールドワーク以降は、授業時間等を使い各自で探究活動を進める体制に入った。町内の協力者のもとへ足を運んで調査活動を行う姿や、イベントの企画などアクションを進める姿など、外部の方々に協力を求めながら活動を進める様子が見られた。

生徒のテーマや教員の専門分野をもとに４つのゼミをつくり、ゼミごとに各自の探究活動の進め方を相談し、定期的に生徒同士が互いの進捗状況を共有した。また、月に１回程度、オンライン探究事務局が主催するメタバース探究部屋も開室し、希望する生徒は外部のスタッフとメタバース上で探究活動の相談を行った。

◆第２回オンライン探究連携授業（10 月 29 日）

６月の１回目の交流会に引き続き、２回目のオンライン交流となる「探究ブラッシュアップ交流会」を実施した。当日は北海道鹿追高等学校の生徒 22 名、栃木県立足利特別支援学校の生徒 1 名、鳥取県立青谷高等学校の生徒 9 名、長崎県立猶興館高等学校の生徒 54 名が参加し、オンラインビデオ通話を活用して交流した。当日は関心の近い生徒同士で小グループをつくり、各自が探究活動を紹介し意見交換を行った。それぞれが、自身の活動を振り返るとともに、今後の探究を深めるヒントを得る機会となった。

◆マイプロジェクトの中間発表会（11 月 26 日）

問いⅠ、問いⅡ期間のまとめとして、地域の集会所や公民館をお借りし、計６か所に分散して中間発表を実施した。生徒各自が、半年間実施してきた活動の進捗とそこから得た学びについてプレゼンテーション形式で発表した。

（エ）マイプロジェクトの問いⅢ・まとめ（11 月～２月）

◆活動の振り返り・まとめ（１月）

11 月以降も、引き続きゼミごとに分かれて生徒が各自で探究活動を進めていった。

冬休み明けの１月以降は、ワークシートを活用しながら、これまで立てた問いやその検証アクションを整理するとともに、活動を通して得た学びについて振り返る機会をとった。

◆第３回オンライン探究連携授業（１月 28 日）

３回目のオンライン交流会を実施した。長崎県立猶興館高等学校の生徒 53 名、長崎県立宇久高等学校の生徒５名が参加し、３校の生徒が関心の近い生徒同士で小グループをつくり、一年の探究学習の成果を発表し合った。お互いの成果を認め合い励まし合う場となった。

◆最終発表会（２月 22 日）

最終発表会は大槌町文化交流センターで実施し、これまでに生徒の活動に関わった方々をはじめ、生徒、保護者、地域住民、教職員、教育関係者等、総勢 280 名を超える参加となった。２年生全員が１年間の探究活動の成果と学びについてプレゼンテーションにまとめて発表した。

（オ）プロジェクト実践事例

◆分野・活動内容一覧

No	分野	発表タイトル	活動内容
1	消防	憧れの消防士になるためには？	将来の夢である消防士を目指し、身につけるべき力を現役消防士たちからヒアリングして実践した。
2	福祉	日本の福祉の未来	地域のお年寄りの力になるために、町内の複数地域で高校生とお年寄りがレクリエーションを通して交流する敬老会などのイベントを企画した。
3	動物	動物虐待を減らすには	犬でも食べられるクッキーの開発にはじまり、活動を進める中で動物虐待に着目。保護猫カフェを運営する方へのヒアリングを通して、どうしたら虐待を予防できるかを検討した。
4	郷土芸能	楽しい×憧れの連鎖～大槌の郷土芸能をつなげたい！！～	大槌の郷土芸能団体の担い手不足を解消するために、求人誌型の冊子の制作や踊りや楽器、衣装の試着を体験できる体験会を企画した。
5	地域活性	Otsuchi Revibe project	アンケートやヒアリングでの調査やイベント企画などを通し、活気とは何か？を多角的に考察し、大槌町内に生み出す方法を模索した。
6	格差	身近な格差	普段見ている漫画やアニメをきっかけに格差に興味を持ち、インタビュー調査を通してその原因を考察した。
7	動物	動物の殺処分を減らすために	動物の殺処分に着目し、殺処分についてインターネット調査や保護猫カフェの方へのヒアリングを通して考察。考えたことを中高生と語り合う座談会を実施した。
8	防災	リアカー＆安堵～誰も取り残さない避難を目指して～	災害時の避難の際、足が不自由な人も避難できるよう、リアカーを使った避難方法を町内に広めるべく、町民運動会の協議を企画した。

9	海	海ごみの問題と海の生き物について	海の生き物を守るためにはま研究会の活動も絡めながら、海を守る方法を啓蒙する活動を実施。
10	スポーツ	スポーツ×身体能力低下	こどもの身体能力の低下に着目し、どうしたら向上させることができるかを模索した。
11	医療	大きな災害時における発達障害者への対応冊子を作る	災害時、発達障害を持つ人がどのように避難すればよいかを調査し、リーフレットにまとめ、放課後デイサービス施設などに配置した。
12	音楽	多くの人から好かれる曲を作るには	自分自身で曲を作ることを目標にどうしたら作ることができるのかをインタビューなどの活動を通して調査した。
13	保育	めざせ！あこがれのえつこ先生！	将来の夢である保育士に近づくために、自分の出身こども園でイベントの参加や企画などを継続的に行った。
14	食	魚を食べる人を増やすには	魚の消費量を増やすべく、魚が苦手なこどもたちでも食べられるような魚料理のメニューを開発した。
15	イラスト	イラスト･動物愛護	動物の虐待を減らすため、自身の得意なイラストを使って告知をしながら虐待の実情を知ってもらうカードゲームイベントを中学生向けに実施。
16	コミュニケーション	コミュニケーションを覚醒させよう！！	自身のコミュニケーション力を向上させることをきっかけに、コミュニケーション力とは何かのアリングやchatGPTを用いた対話などを行って考察した。
17	看護	ひだまりプロジェクト	将来の夢である看護師という職業に注目し、複数の病院でのインタビューを行い、自身の目指したい看護師像を明らかにした。
18	イラスト	自分の描いた絵で子供達を楽しませるにはどうしたらいいか？	自身が得意なイラストを生かしてこどもたちを楽しませるため、こども向けイベントのポスターの制作や看板を一緒に作るイベントの企画を行った。
19	運送	運送業について考える	将来目指している運送業に関する理解を深めるべく、アンケートなどを通して「運んでほしいもの」を募集。地域の方から依頼があった薪運びを行った。
20	メイク	将来の夢について	ギャルをもっと可愛くできる美容師を目指し、美容室でのフィールドワークやギャルの定義に関する考察を行った。その上で小中学生向けのネイル体験教室を企画した。
21	食	縁日の屋台で出せる新メニューを考えたい！	大槌のお祭りを盛り上げる屋台料理を開発することを目標に屋台で実際によく出るメニューの施策や大槌町の特産品であるピーマンを使用したメニューの開発を行った。

22	郷土芸能	芸術文化でつなぐ、地域と未来	郷土芸能に着目し、特に出身である釜石と高校のある大槌の郷土芸能への意識の差を考察する中で、地域間の壁をなくす方法を模索した。
23	心理	関係が近い人と話すには	初対面の人よりも小中時代の同級生や親戚など関係性が近い人と話すことが苦手であることを克服するため、どうしたらうまく話せるかを話したいことリストの作成などを通して試みた。
24	食	世界の料理と大槌サーモンをかけ合わせたオリジナルレシピを作る！	大槌サーモンを活用した新メニューを開発するにあたり、世界の料理とかけ合わせることを検討。大槌サーモンを使用した麻婆豆腐を試作した。
25	福祉	手紙で伝える	お年寄りや障がいを持つ方に喜んでもらうために、自分の気持ちを手紙で伝え、届ける活動を行った。
26	食	料理人になるには	将来の夢である料理人を目指し、自作の料理を家族にふるまったり、町内のホテルの朝食会場で魚をさばく体験を行ったりした。
27	起業	起業するには	起業に興味を持ち、実際に起業された人に起業に必要な要素をヒアリングした。また、似たテーマを設定した同級生が企画した起業を促進するイベントの運営にも携わった。
28	イラスト	誰かの役に立つイラストを描きたい	得意なイラストを誰かのために使いたいと思い、地域のイベントや同級生のマイプロのチラシやポスターの作成、地域の方への似顔絵のプレゼント、こどもたちとの看板づくりなどを行った。
29	防災・復興	パーククラフト計画「防災×公園」	災害時に活用できる公園の在り方を模索したり、長崎県で行われた全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加したりする中で、自分なりの復興プランを計画した。
30	食	パンと郷土料理を組み合わせて郷土料理の可能性を広げたい！	大槌町の郷土料理であるすっぷくを活用したパンを開発し、校内で同級生や教員に試食してもらった。
31	美容	美容師は何を心掛けて接客しているか	将来の夢である美容師になることを目指し、複数の美容室でヒアリングを行った。
32	学校生活	楽しく部活するには	部員の減少やコミュニケーションの齟齬により部活が楽しくなくなっていたため、それを解消すべくインタビュー調査や助っ人の募集活動を行った。
33	イラスト	イラストを社会に繋げるにはどうしたら良いか	自身の得意なイラストを社会につなげるべく、平和をテーマに絵を描いた。

34	起業	大槌チャレンジフェスティバル～起業促進プロジェクト～	起業まではいかないが、何かやってみたいという人の背中を押すべく、起業体験ができるイベント「大槌チャレンジフェスティバル」を企画した。
35	看護	訪問看護について	将来目指している看護師の中でも訪問看護という仕事に興味を持ち、実際にインタビューを行うことで訪問看護に関する理解を深めた。
36	心理	ストレスを減らす為には	ストレスを解消するための方法をスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーへのヒアリング、同級生へのアンケート調査を通して模索した。
37	消防	消防士とは	将来の夢である消防士を目指し、インターンシップに参加したり、消防士や大槌町の防災対策課の方へのヒアリングを行ったりして理解を深めた。
38	動物	猫が安全に暮らすには	幸せに生きることができていない猫を減らすため、保護猫活動に関わったことがある人にインタビューを行い、考察した。
39	スポーツ	サッカーにおける技術と身体操作	サッカーの技術を向上するため、身体操作能力に注目し、実践を行った。
40	ゲーム	オオツチクエスト	大槌町の人口減少問題をゲームで解決すべく、大槌町をフィールドにしたすごろくのようなゲームを制作し、実際に同級生に体験してもらった。
41	歯科･スポーツ	歯の噛み合わせとジャンプ力の関係について	自身が所属するバスケットボール部の活動と将来の夢である歯科衛生士の仕事を掛け合わせ、歯を食いしばることがどれほどパフォーマンスに影響するかを実験した。
42	イラスト	イラストがどんな形で役に立つのか	自分の好きなイラストを描いてプレゼントしたり、町内で行われているイラストイベントについてのレポートを作成して渡したりといった活動を行った。
43	ラップ	先生の人生をラップしてみる	自分の好きな HIP HOP を生かすため、先生の人生をヒアリングしてラップにすることを試みた。
44	心理	地域の安全を守るプロジェクト！	将来の夢である警察官に関して調べる中で、保護司という役割を知り、犯罪後にどうしたら人は更生できるのかを考察した。
45	海外	なぜ日本人は海外に比べ人の目を気にしすぎてしまうのか	海外と日本のコミュニケーションの違いについて同級生へのアンケートや実際に海外で暮らす人、外国人へのインタビューを通して考察した。
46	学校生活	The school is fun project	より楽しい学校生活を生徒が送れることを目指し、人に優しくなれるゲームを行うことで思いやりを持つ生徒を増やすことを目指した。

47	格差	見えない境界線をなくしたい	難聴や知的障害といった世の中の様々な格差に興味をもち、その中でも学校内で障がいを持つ人がどうしたら困らないかを様々な人へのヒアリングを通して考察した。
48	心理	自分に自信をつけよう	自分に自信をつけるために、同級生に自身の長所に関するアンケートを実施した他、様々な地域の活動に参加した。
49	誹謗中傷	イラストで誹謗中傷を減らそう	自身が SNS 上で誹謗中傷されたことをきっかけに、自分の得意なイラストを使って誹謗中傷を減らす方法を模索した。
50	音楽	ビートボックスの音の組み合わせ	ヒューマンビートボックスができるようになるため、自分で技の練習を行い、また友人にも教える活動を行った。
51	心理	ジェントルマンになる方法	どうしたらジェントルマンになれるのかという問いを立て、インタビュー調査を行った。また結果をもとにジェントルマンになるためにどんなことができるかを対話する座談会を実施。
52	ゲーム	ゲームで地域を盛り上げよう！	プログラミングを行ってオリジナルのゲームを開発。地域を盛り上げるためにゲームをどのように使えるかを検討した。
53	読書	読書する人を増やそう！！！	若者の読書離れに着目し、どうしたら読書をする人が増えるのかをアンケートや他校の生徒との意見交換を踏まえて検討した。

《事例①楽しい×憧れの連鎖～大槌の郷土芸能をつなげたい！！～》

大槌の郷土芸能を未来につなげていくことを目指して活動を始めた。最初に町内の郷土芸能団体から 5 団体 10 人に郷土芸能に関するヒアリングを実施、その後中高生へのアンケート調査、地域住民との座談会などを経て、情報のわからなさに課題があるのではないかと考えた。そこで各郷土芸能団体の魅力や練習の詳細を伝える冊子「大槌芸能なび」を作成。しかしそれだけでは担い手の増加につながったと考えられなかったため、郷土芸能団体に協力を依頼し、楽器や踊り、衣装の試着体験のできる郷土芸能フェスタというイベントを企画。高校生のボランティアスタッフと 9 団体の郷土芸能団体の協力のもと、70 名を超える参加者を集めた。以上の活動から郷土芸能を継承していくためには「楽しい」と「憧れ」の 2 つの要素が連鎖していくことが重要であると考察した。

《事例②大槌チャレンジフェスティバル～起業促進プロジェクト～》

１年次の SIMulation おおつちから継続し、大槌町内で起業する人を増やすことを目標に活動。起業まではいかないが「やってみたい」という気持ちがある人が起業体験をできるようなイベントを企画し、大槌商工会に提案した。その後、高校生５人のチームを結成し、大槌商工会の協力のもと出店者の募集や参加者の募集を行い、大槌産業まつりの場でブースをお借りして、２人の地域の方の起業体験を支援した。また、この活動を通して、「チャレンジ」に必要な要素を考察し、同級生のマイプロジェクトの伴走をする活動も行った。

《事例③リアカー＆安堵～誰も取り残さない避難を目指して～》

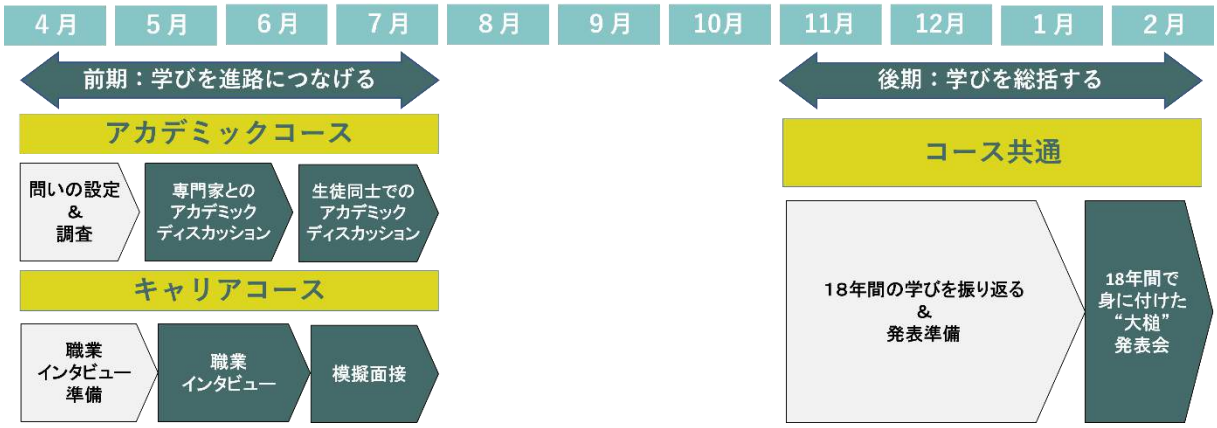
自身のコミュニケーション力を向上させることを目標に始まったこのプロジェクトでは、最初にオンライン上で初対面の人にコミュニケーションのコツを聞く活動などを実施。活動を続ける中で、地域のイベントに参加するようになり、町内の安渡地区の避難訓練に参加した際、リアカーを使った避難方法について知った。その方法を町民に広め、より身近に感じてもらうべく、町民運動会の企画としてリアカーを使ったリレー競技を企画、実施した。また、活動を進める中で、「バイスタンダー」という考え方を知り、災害時に自分が逃げるだけでなく、近くの助けられる人を助けるという意識を広げていくために何ができるかを考えた。

◆生徒の感想

・自分の好きなことに対して、全力で解決策などを見つけてプロジェクトを完遂させるために努力を出来た。
・自分のコミュニケーションの不安が少しなくなった。逆に自分の強みになった。
・色々な人と関われて、自分の思考力や行動力が高まっていくのを実感できた。
・周りと協力してマイプロジェクトに取り組み、何度も問いを考え、アクションすることができた。
・自分のアイデアに興味を持ってもらえてよかった。
・自分が取り組みたいテーマについて仮説を深めることができた。
・美容で接客も大切とは思っていたけど、実際にマイプロとしてやってみると接客の大切さを感じられた。
・普段関わる機会が無い人とも関わることが出来た。
・自分の興味を見つけることができた。
・みんなが協力し合ってマイプロに取り組むことができた。

ウ　３年生の取り組み

前期（４月～７月）、後期（11 月～２月）に分けて実施した。前期では、これまでに取り組んできた学習をそれぞれの希望進路へ接続することを目指し、大学・短大進学や公務員を希望する「アカデミックコース」と専門学校進学や就職を希望する「キャリアコース」の２コースで授業を展開した。関心あるテーマの専門家や希望する職種の社会人との対話を通して、自らの現状と将来の在りたい姿を比較しながら進路実現に向けて必要な力を認識することができた。後期では 18 年間の学びの集大成として、これまでの人生で身に付けた力と、様々な経験から得られた知見について語るプレゼンテーションを作成した。最終的には、生徒がそれぞれ自分のプレゼンテーションを１番聴いてほしい方（幼小中でお世話になった先生、マイプロジェクト活動等でお世話になった地域の方等）を招待し、プレゼンテーションを発表した。１年間を通した授業の流れは以下の通りである。



【前期（４月～７月）】

（ア）アカデミックコース：「アカデミック・ディスカッション」

a　問いの設定・先行研究調査

前年度のマイプロジェクトで探究した問いをベースに、ディスカッションで話したい問いを設定した。問いを設定する際には、WILL（やってみたいこと）、NEED（興味のある社会課題・学問分野）を書き出すことで、自分のマイプロジェクトがどのような学問分野や研究と結びついているのかを認識した。また、自分の WILL と NEED と関連のありそうな大学・学部学科を調べ、論文検索サイト等を活用して先行研究の調査を行うことで、より進学と接続するような工夫を行った。その後、各生徒がディスカッションを行いたい専門家（大学教授、有識者等）を選定し、メールや電話等でアポイントを取った。

b 専門家とのアカデミック・ディスカッション

生徒自身のテーマと近い分野で研究や実践に取り組む専門家とのディスカッションを下記の 15 テーマで実施した。生徒が３～４人で１組になり、自分のテーマ以外のディスカッションにも参加する形式にすることで、多様な問いについて深く考える機会をつくった。その結果、他のテーマと自分のテーマを関連させて思考し、自分なりの意見を述べる力が身に付いた。

【問い・テーマ、講師一覧】

No	問い・テーマ	講師
1	どうしたら移住者の意見を行政や地域に反映できるのか	栗本　拓幸氏 （株式会社 Liquitous　代表）
2	どうしたら誰もが生きやすい社会を実現することができるのか	佐藤　駿一氏 （東京大学付属病院　医師）
3	「よそ者」が移住先で活躍するためにはどうしたらよいか	上田　彩果氏 （特定非営利活動法人 SET　代表）
4	どうしたら地域のブランディング化が実現するのだろうか	渡久山　真一氏 （NPO 法人東村観光推進協議会　理事長）
5	幸福感が自殺率に与える影響はどのようなものがあるのか	伏島　あゆみ氏 （金沢工業大学　准教授）
6	人はなぜ感動体験にお金を払うのか	園田　健二氏 （聖徳大学短期大学　特命教授）
7	災害関連死を減らすために、声をあげられない人たちにどう寄り添うか	佐々木　亮平氏 （岩手医科大学 教養教育センター 人間科学科体育学分野助教）
8	どうしたら対話で共生社会を形成していけるのだろうか	古田　雄一氏 （筑波大学　助教授）
9	どうしてダブルビハインドが生まれるのだろうか。それは、国や地域、文化、宗教による影響があるのだろうか	加藤　舞氏 （元盛岡市議会議員）
10	治療を受ける子どもたちの知る権利と心理	小林　舞氏

	的安全性をどちらも担保するにはどうしたらよいのか	（武蔵野市赤十字病院　看護師）
12	どうしたら自由と共生が共存する地域コミュニティをつくることができるのか	豊田　庄吾氏 （広島県三次市教育委員会　教育次長）
13	どうして自分にはシビックプライドが醸成されていないのか	吉成　信夫氏 （みんなの森ぎふメディアコスモス　館長）
14	臼澤鹿子踊りを存続するためには、どのような組織であるのがよいのか	池本　修悟氏 （公益社団法人ユニバーサル志縁センター　専務理事）
15	ミニシアターが市民に与える影響はどのようなものがあるのか	玄田　悠大氏 （独立行政法人国際交流基金　研究員）

c 生徒同士でのアカデミック・ディスカッション

活動のまとめとして、専門家とのアカデミックディスカッションを通して生まれた問について、生徒同士で行うアカデミックディスカッションを実施した。ディスカッションを通して自分が探究してきた問いがどのように深まり、今後の進路等にどのように活かしていきたいかを発表した。

【生徒の感想】

・はじめの問いはよそ者がチャレンジしやすい環境とは？でしたが、話してみると環境を整える前に挑戦者側がしっかり Will を作っておくことを重要視した方がいいなとおもいました。成功経験が地域に広まればいつか「チャレンジしやすい環境」というのも出来上がっていくのかなと思いました。

・お忙しい中、お話していただきありがたかったです。シビックプライドがないからと言って、焦る必要は無いということ、人それぞれタイミングやきっかけが違うということが分かりました。ぎふメディアコスモスという施設が気になって調べてみましたが、とても立派な建物で、大槌にも欲しいなと思いました。図書館は、あまり喋らないで黙々と本を読んだりするイメージだったけれど、みんなが気軽に集まれるような施設なのは、面白いなと思いました。

・私はマイプロジェクトでコミュニティについて取り組んでいたので、参考になるお話がとても多く、常に楽しんでディスカッションに参加出来ました。will、can、need の重要性を改めて知ることができました。

（イ）キャリアコース：「 職業インタビュー」

a　職業インタビュー

はじめに、自らが将来なりたい職業について、その職業に関する情報について、調べ学習を通じて収集した。その後、その職業の業務内容や求められる能力等について仮説を立て、実際にその職業に従事している先輩に対してインタビューを行い、仮説の検証を行った。また、その職業に就きたい理由に関するプレゼンも同時に行い、内容に対して先輩からフィードバックをいただいた。

【職業インタビューに協力いただいた事業所一覧】

No	職種	ご協力いただいた事業所名
1	製造業	株式会社千田精密工業 大槌工場
2		株式会社エノモト 岩手工場
3		日本製鉄株式会社 北日本製鉄所釜石地区
4		SMC 株式会社 釜石工場
5	介護士	社会福祉法人楽水会 アミーガはまゆり
6	助産師	大槌町役場健康福祉課
7	栄養士	
8	消防士	釜石大槌地区行政事務組合消防本部大槌消防署
9	保育士	社会福祉法人吉里吉里保育園
１０		学校法人樅木学園おさなご幼稚園
１１	看護師	岩手県立大槌病院
１２		道又内科小児科医院
１３	医療事務	道又内科小児科医院
１４	自動車整備士	総合自動車整備株式会社
１５	製菓・製パン	モーモーハウス大槌
１６	アイリスト	La SHEs
１７	美容師	hearty hair presents
１８	トリマー	Dog Salon Zero

b　志望理由と、自身が今後身に付けるべき力の検討

職業インタビューでの学びをもとに、その職業に就きたい理由や、今後自身が身に付けるべき力について改めて検討し、自身の考えを他者に対して伝えられるように整理した。

c　模擬面接（最終発表会）

活動のまとめとして、生徒１人あたり約５分間の模擬面接を行った。これまでの活動を通して整理した自身の考えを面接形式で発表してもらい、その内容を評価した。面接の主な質問項目は以下の通りである。

①あなたが将来就きたい職業とその理由を教えてください。
②あなたの強みを教えてください。また、その強みを活かして、職業や企業に対してどんな貢献をしたいですか。
③その職業に就くために、改善すべき自分の課題や、伸ばしたい力を、具体的なエピソードを交えて教えてください。
④就きたい職業の需要が将来どのようになっていると思いますか？また、将来の自分の理想の姿を、その職業の未来と関連させて話してください。

【生徒の感想】

・実際にお話することで、インターネットで調べただけでは知れなかったことを具体的に知ることができました。私と同じようなきっかけで栄養士を目指した人がいたことに共感が持てたし、実際に栄養士として働いている方からだからこそ聞ける話がたくさんありました。また、今後世の中が変化していく中で、栄養士の需要は更に高まっていくのではないかというお話を聞いて、私自身も、将来誰かの健康を支えられるような栄養士になりたいと思い、志望する気持ちが強くなりました。

・幼稚園と保育園の違いや、保育士のやりがいや大変さなどを知ることができました。インタビューの実施前は、保育士の魅力や楽しいところばかりに目を向けていましたが、実際には大変なこともたくさんありました。子どもの命を預かっている職業だからこその責任や苦労は、直接話を聞かなければ分からないことだったので、学びが多かったです。

・職業インタビューや模擬面接を通して、自分の将来や仕事についてじっくりと考える時間を得られたのが良かった。模擬面接でも自分の考えを上手く話すことができたので、今後の就職活動にも自信を持って取り組みたい。

【後期（11 月～２月）】

（ウ）コース共通：「私が 18 年間で身に付けた大槌（ハンマー）と知見」

a　オープンダイアログ

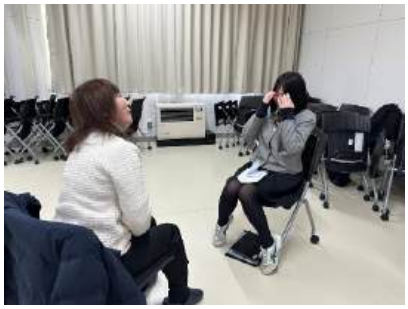
発表の内容を考えるにあたり、18 年間で身に付けた力について対話を通して確認する「オープンダイアログ」というワークを行った。このワークは、生徒複数名と、教員１名を加えたグループをつくり、その中から選んだ対象者１名の長所や身に付けた強み等を、残りの生徒と教員で対話を行って見つけるという内容である。自己理解だけではなく、他者からの視点で自分にどのような強みがあるのかを理解することを目的として行った。

b　プレゼンテーションの作成

学校コンセプトである「大海を航る大槌（ハンマー）を持とう」になぞらえ、自身が 18 年間で身に付けた「大槌（ハンマー）＝強み」をテーマとした５分程度のプレゼンテーションを作成した。どの生徒も、最終発表会に向けて一生懸命作成を進めた。

c　最終発表会（令和７年２月 11 日）

最終発表会は、生徒がそれぞれ自分のプレゼンテーションを１番聴いてほしい方を選び、直接電話やメールで招待する形式で実施した。幼稚園・小学校・中学校でお世話になった先生、マイプロジェクトでお世話になった地域の方、他校に進学した友人、保護者の方等、約 50 名の方に集まっていただいた。会の中盤では、生徒とゲストがお互いに手紙を交換し合う時間も設けた。中には、生徒と関わった当時を回想し、成長した姿に思わず涙を流すゲストもおり、参加者がそれぞれの思い出や未来に思いを馳せる温かい場となった。



d　発表資料の公開

生徒それぞれの「18 年間で身に付けた“大槌（ハンマー）”」を紹介する資料とショートムービーを作成し、大槌高校ホームページでの公開や、地域の文化交流施設、ショッピングセンターでの展示を行った。

【生徒の感想】

・オープンダイアログの時間で、友達が自分のことを真剣に話してくれたのが嬉しかったです。こんなに自分のこと知ってくれていたんだと感動しました。

・「成長したね」と言ってもらえて、とても嬉しかった。

・震災で保育園が流されてしまったけど、いつも温かく見守ってくれたことにとても感謝している。今日も励ましてもらったので、これからも頑張りたい。

・発表会はとても緊張したけれども、手紙を読んだ時にゲストの方が涙を流していて、思わず私も泣いてしまいました。これまで色んな方にお世話になったことを実感しました。

【最終発表会に参加したゲストの感想】

・皆さんのすばらしい発表を聞き、しっかり自分をもっているんだなと感心しました。将来がとても楽しみです。

・生徒一人一人が、これまでの経験をもとに自分や自分の想いを、しっかりともち、発表する姿に感動しました。将来の大槌（日本も含み）は希望にあふれているなと確信した時間になりました。ありがとうございました。

・高校生のみなさんの発表を聞いて、３年間でこんなにも大人になるんだなと驚かされました。周りの人の気持ちを考えながらも、自分らしさを見つけ、将来に向かってがんばろうとする姿に大人の私も学ぶことがたくさんありました。

（２）学校設定教科「地域みらい学」（５教科）

ア　「ひょっこり表現島（国語）」

実施学年・単位数	２年生　２単位
設置理由	地域言語を用い、地域独特の表現を深く理解することにより、より多彩な「伝える力」や「表現力」を育成する手立てとするために設置する。
科目目標	地域言語を深く学び、身近な言葉を大切にしながら表現力を高める。
今年度の取組	年間を通して「表現」を軸に授業を構成した。 【「話す・聞く」ことを中心とした表現】 「他己紹介」「ビブリオバトル」（前期中間）「寸劇」（後期中間）の活動を通し、「話す・聞く」ことを中心とした表現活動を行った。「ビブリオバトル」では、５分間、原稿を見ずに本の魅力を紹介しあう活動に取り組んだ。「寸劇」では、グループで「喜」を題とした３分間の劇を通して、特に身体による表現力やコミュニケーション能力などを高めた。 【「書く」ことを中心とした表現】 各活動後に「振り返りシート」に取り組み、生徒の取り組みを文章で表現させた。また、「文化祭のポスターを作る」（後期中間）、「川柳作成」（前期末）などといった活動から、限られた文字数や必要な情報を効果的に盛り込むことができるようになった。 【知識・技能領域】 表現力のベースとなる漢字力や語彙力育成を目的とした小テストを、期ごとに行った。自己調整力の向上をねらいとし、テスト範囲を生徒に提示し、項目ごとに小テストを受けさせ、合格したら次のステップに進ませる方法で小テストを行った。 【方言で表現】 後期末では、生徒一人ひとりが得意とする表現方法で「方言」に関する創作をメインとした活動を行った。テーマ設定、進め方などに関しては生徒にゆだね、担当教員が適宜伴走し創作物の完成を目指した。「大槌の方言でアフレコ」「全国の方言で『ありがとう』をパワーポイントにまとめる」「方言で神経衰弱」などを制作した。

	さらに、２月 12 日に大槌町立吉里吉里小学校３，４年生を招待し、それぞれの生徒の創作物をもとに、小学生に対し「方言に関するミニ授業」を行った。１組１ブースを構え、小学生たちがスタンプラリー方式で高校生のブースを巡り、１回あたり３～５分程度でクイズやカルタを通して交流した。
現状の成果と課題	【成果】 年間を通して様々な表現を扱ったことにより、それぞれの生徒が持つ得意分野の能力を生かしつつ、不得意な生徒を得意な生徒がフォローしながら活動に取り組むことができていた。また、小学生との交流の際には創作物アレンジや小学生が楽しめるようルールを作るなどの工夫がみられ、対象に応じて柔軟に表現を変えることができていた。 【課題】 方言を全国としたため、調べ学習に終始してしまった。本やインターネットなどを用いて調べたため、正確な語法や発音などをチェックすることができず、言葉を雑に扱ってしまった。岩手県でも、よく代表的な方言として「～がんす」があげられるものの沿岸地域では使わない、といった使用実態が見られるように、その言葉が実際どんな地域で用いられているのか、もしくはもう用いられなくなってしまったのか、扱う言葉の吟味の時間が必要である。
今後の取組	表現を軸とした活動は続けながらも、地域の人との交流やヒアリングなどを通し、生徒がより「生きた言葉」を探究していけるよう、伴走していきたい。

イ　「まちづくり探究（地歴公民）」

実施学年・単位数	３年生　２単位
設置理由	複雑さが増す社会においては、正解が一つに定まることはなく、様々な課題（矛盾・葛藤・衝突）が生まれる。課題の解決は容易ではないが、それぞれの主張の背景を理解しながら、解決の方向性を探る力が求められる。
科目目標	身近な地域や日本をテーマに、社会が抱える課題や、今後の社会の在り方について考えることをとおして、人間関係の調整や人間関係に係る課題の解決能力向上を図る。
今年度の取組	４月から６月は、「札幌と沖縄はどちらが住みやすいのか」というテーマでの話し合いや、「このまち一番選手権」と題して無作為に選ばれた「まち」の魅力を調べてプレゼンテーションを行う活動を通して、魅力的な「まち」とは何かを考えた。 ６月から９月は、「SIM おおつち２」と題して、大槌町が実際に担っている政策をテーマに調べ学習を行った。トレードオフの考えから、大槌町の政策の優先度をランキング付けし、将来の大槌町がどのような形に

	なるとよいと思うかを話し合った。９月から 11 月は、「桃太郎電鉄　教育版」を用いて、ゲームを通して学べる各地の「まち」の魅力や特徴、ゲームで学ぶことの意義をグループワークを通じて考えた。11 月から３月は、「大槌の魅力が伝わるゲーム」の作成に挑戦した。東京（都会）と大槌を比較しながら大槌の魅力が伝わるよう、「レシピ」というゲームを土台にしてゲーム構成を考える中で、郷土の魅力に生徒自身が再度気づきながら活動をした。１月には大槌学園の中学生に作成したゲームをプレイしてもらう交流会を開催した。
現状の成果と課題	【成果】 　自らの主張を行う際に、数値や統計といったデータなどの客観的な根拠を提示できるようになった。また、グループで協働して１つの取り組みを完遂するコミュニケーション力、責任感が養われた。 　大槌を舞台にして授業を構成したことで、生徒が授業内容に対して実感や興味を持ちながら取り組むことができた。最後のゲーム制作では、それぞれが思う大槌にしかない魅力をよく考え、郷土への愛着を再確認できた。 【課題】 　１つ１つの取り組みにかける時間の見通しが甘く、十分にやりこめなかった取り組みがあった。また、生徒同士での建設的な対話もグループによってまちまちで、１人の意見に賛同して活動を進めるような場面もあった。今後は、全員が意欲的に取り組めるようなテーマ、題材を探し、一人ひとりの成長を促していきたい。
今後の取組	今後も、導入は身近な問いにしながらも、まちづくりだけでなく、選挙権や人権について考え、町政や復興に関わること、意思決定などについて考える機会を設けたい。

ウ　「くらしｍａｔｈ（数学)」

実施学年・単位数	３年生　２単位
設置理由	生活をする中で気づかないうちに様々な分野で数学の知識が活用されている。具体的に身近な分野で活用されている数学を学ぶことにより、数学の良さを認識するために設置する。また、数学を用いて暮らしの中にある課題を発見し、解決しようとする態度の育成を目指す。
科目目標	身の回りにある事象について、数学を用いて考察する能力を培い、数学の良さを認識できるようにするとともに、それらを活用して生活に役立てる態度を育てる。
今年度の取組	前期は、「日常生活の事象を数学化して解決する」ための演習として、客観的なデータや数値に基づいて判断をする場面（生活費、コマづくり等）や、最適解がみつからない問に対して複合的な視点で考える場面（求人票の比較，宝くじの分析等）を設定し、学習した。また、データを用いて探究するための基礎技能として、グラフの活用・アンケート調査・Excel の扱い方について学んだ。 後期は、文化祭の模擬店の売価と原価についての関係や、地元の名産品をデータ分析しレポートにまとめ、それらを材料とした料理についてグループごとに分量や材料費を計算し調理を行った。文化祭では、予想販売数から必要な食材の量を計算したり、予算内で食材や装飾品を準備するための計画をたて、模擬店の運営に役立てた。地元の名産品については、データの情報が限られているため、地域との関連が薄くなってしまったが、自分で調べたデータをグラフにして分析・考察することができた。

現状の成果と課題	【成果】 主観的で単一的視点になりがちであった多くの生徒の記述内容が、徐々に客観的・複合的な視点に変化が見られる傾向にある。また、日常生活と数学を関連付け活用できることを理解できるようになった。 【課題] 今年度は、生活の中で体験する事象が、今まで学んだ数学としていることを中心に学習したため、地域との関連づけることが難しかった。また、どうしても短いサイクルの学習となり、「考察する」段階まで思考を深めることは難しく、自由度の高い学び（自由なアイデアを生かす）・探究（深く考える場面設定）・多数のジャンルに触れる（短いサイクル）の３点の鼎立は実現できていない。
今後の取組	・歴史的に数学がどのような役割を担ってきたか、人々の暮らしとの関わりなどにも触れ、数学を身近に感じられるコンテンツを開発したい。 ・数学的に事象をとらえて考察する力や根拠を言語化する力を育成するとともに、地域に絡めた学習を検討したい。

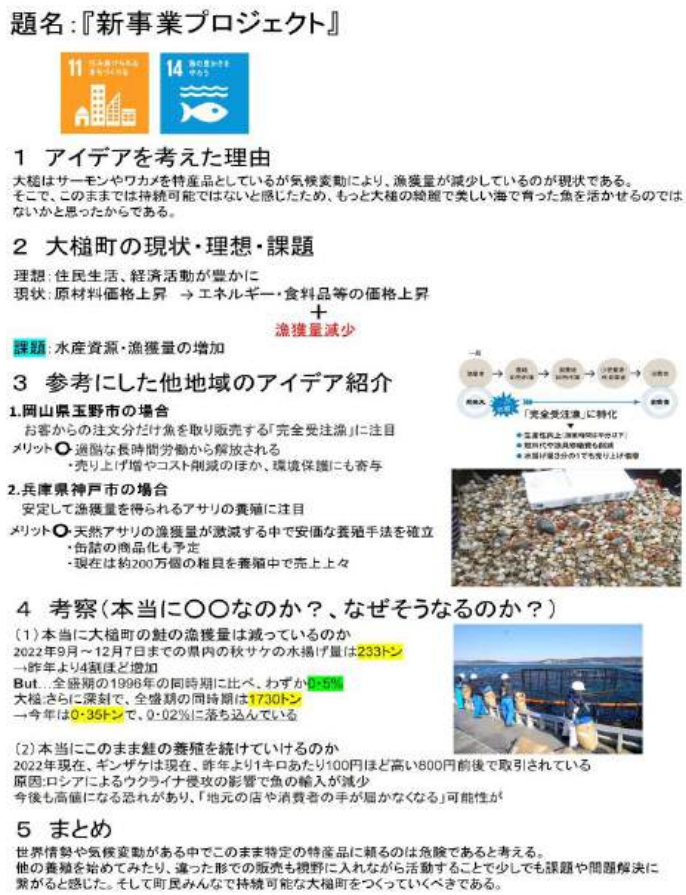
エ　「おおつちラボ（理科）」

実施学年・単位数	３年生　３単位
設置理由	既習の理科科目の内容を日常生活と関連付けることで、より深い理解の定着を目指し設置する。特に課題解決学習に取り組むことで問題に対しての仮説設定や、実験・検証方法を自ら模索し科学的課題への関心、理解を深める。
科目目標	理科的、科学的な学習内容を活用し、身近な理科的、科学的課題を自ら仮説を立て、実践を行うことで、各分野の知識を統合し自ら課題を解決する姿勢を身に付けるようにする。
今年度の取組	日常生活の中での「便利・不便」に感じることや「不思議」なことから、テーマを設定し、仮説を立て、調べ学習によって検証する過程を学んだ。「海洋プラスチック」や「火力発電」などの科学的事実・現象に対し、賛成・反対の意見を示しながらグループで討論を行い、科学的知見

を用いて賛否の折衷案を探る体験を行った。

地域課題と SDGs に注目し、17 項目ある中で「海の豊かさ」「飢餓をゼロに」をテーマに大槌町の増養殖に関する取り組みについて現状把握を行った。町内のフィールドワーク（岩手大槌サーモン養殖視察）を通じて、取り組みの成果と課題について学んだ。また、SDGs の観点から大槌町の今後について考え、その内容をポスターとしてまとめ、科学的な視点が現代社会とも繋がることを学んだ。

＜生徒がまとめたポスターの例＞



現状の成果と課題	【成果】 調べて終わるのではなく、根拠となるデータを用いて議論を行うことで、自分の言葉で論理立てて理科的に説明する力や、自身とは相対する意見についても耳を傾ける姿勢を身に付けた。また SDGs についての理解が深まり、地域の持続可能性に対する課題についても、図やグラフを活用し、自分なりにまとめる力がついた。さらに、他地域と自身の地域を比較・関連させて考える手法も身についた。 【課題】 疑問や違和感を持つ土台となる理科的な知識不足があり、テーマを自分で見つけることが難しい生徒が多い。大槌という地域には考えるテーマが多くあるが、自分なりに興味を見出し、噛み砕くことができるような基礎的な学力が必要となる。
今後の取組	・大槌サーモンについての取り組みは次年度以降も継続したい。 ・郷土財エリアなどを題材に、ビオトープづくりに携わることで自然保全について考える機会となる授業を組みたいと考えている。 ・次年度以降も担当教員の専門性を活かし、地域と関連した取り組みについて検討したい。

オ　Ｅパスポート（英語）

実施学年・単位数	２年生　２単位
設置理由	英語コミュニケーションⅠ及び論理表現Ⅰの学習内容を相互に関連付け、教科書では扱わないテーマや場面を設定し、発展的な英語によるコミュニケーション能力を育成するために設置する。特に５技能（「読む」「書く」「聞く」「話す（発表・やりとり）」）をバランス良く取り入れ、多様な場面での実践的な英語コミュニケーション能力のさらなる育成を重視する。
科目目標	英語コミュニケーションⅠ及び論理表現Ⅰの学習内容を統合させ、多様な場面における実践的な英語によるコミュニケーション能力の育成を目指す。
今年度の取組	前期で身に付ける資質・能力をジブンゴト・課題設定と置き、ネイティブスピーカーの故郷であるアメリカ・コネチカットに「留学をしてみる・現地での日本文化の紹介」などをテーマに、税関、ホテル・ホストファミリー、医療機関、買い物など様々な場面を設定して会話練習を行った。航空券サイトの見方・チケットの買い方、ドルから円（その逆も）への計算も英語で行った。生徒たちは自分の伝えたいことを英語にして、英語を母語にする人にもコミュニケーションを取る積極的な姿勢を身に付けるべく学んだ。後期は留学生が日本に来た設定で自分の学校の行事や町の紹介、12 月に実施される修学旅行を前に、目的地である京都・大阪について英語で紹介する場面を設定した。11 月には異文化理解をテーマにゲスト（アメリカ、ガーナ、フィリピン）を招いて母国で人気のトランプゲームやおはじきを使った伝統的な遊び、身体の部位を英語で表現しながら行う遊びなどを紹介して貰い、一緒に楽しみながら学ぶことができた。その後は再びテーマを海外での生活に戻し、アパートを探したり、仕事の面接試験を英語で準備をしながら自分の進路に必要なこと、自分の PR できることについて考えさせた。

現状の成果と課題	【成果】 　将来的に外国の方とコミュニケーションを取ろうとするために必要な学びを続けるための、基礎的な態度を身に付けることができた。また、ショッピングや入国審査などの身近なテーマを題材にすることでより真剣に取り組む様子が見られた。インタビューテストをほぼ毎回行い、NS との１対１、もしくは１対２のやりとりの回数を重ねていくことで発音の自信につながった。 【課題】 　基礎的な英語コミュニケーション能力を育成するため、５技能のバランスをどのように取るかが課題である。また、どの教員が担当しても一定の成果があがる妥当性、持続性についても今後対応していく必要がある。常にペアやグループが固定されていたので、誰とでもやりとりができるような雰囲気づくりや仕掛けを考えていく必要があると感じた。
今後の取組	・外国人に向けた大槌の紹介映像や HP の英語版製作に取り組みたい。また、より身近なテーマについて英語で表現する機会を設けたい。 ・コラボスクールとの協力を得ながら姉妹都市であるフォートブラッグとの連携を図りたい。

４　目標の進捗状況、成果、評価

（１）魅力化評価システムについて

◆調査概要

「高校魅力化評価システム」とは、「学校、地域における生徒の教育環境」の見える化、そして「生徒の成長」の見える化を支援し、授業・指導の改善や、学校と地域・社会との協働のあり方の検討に役立てていくためのアンケート調査である。

本校ではすべての教育活動を通して「大槌高校魅力化構想骨子」で設定した目指す人物像の３つの柱である「自立」「協働」「創造」を育んでいる。その、取組の成果のデータを可視化するため、年２回(５月・２月)にアンケート調査を実施している。

※アンケート結果の詳細は【表２】参照

◆調査結果

令和６年度も、５月に１回目の調査、２月に２回目の調査を実施した。今回は、魅力化の最終的な成果となる、【表１】⑤ウェルビーングの項目の５月から２月までの約１年間の変化を、【表２】に示した。

【表１】魅力化評価システムの調査項目

生徒向け調査の構造	主体性	協働性	探究性	社会性
①　学習活動	主体性に関わる学習活動の量	協働性に関わる学習活動の量	探究性に関わる学習活動の量	社会性に関わる学習活動の量
②　学習環境	主体性に関わる学習環境の質	協働性に関わる学習環境の質	探究性に関わる学習環境の質	社会性に関わる学習環境の質
③　能力認識	主体性に関わる生徒の自己認識	協働性に関わる生徒の自己認識	探究性に関わる生徒の自己認識	社会性に関わる生徒の自己認識
④　行動実績	主体性に関わる生徒のここ１カ月の行動	協働性に関わる生徒のここ１カ月の行動	探究性に関わる生徒のここ１カ月の行動	社会性に関わる生徒のここ１カ月の行動
⑤　ウェルビーング	私の現在の幸せ“いま、学ぶための幸せ”	私の現在の幸せ“ともに学ぶ幸せ”	私の現在の幸せ“目標に向かい学び続ける幸せ”	私の現在の幸せ“学びを未来に繋ぐ幸せ”

【表２】⑤ウェルビーングの項目の結果

	５月	２月	差
主体性に関わるウェルビーイング	54.6%	61.3%	6.7
1. 今の生活全般の満足度	60.5%	63.6%	3.1
2. 普段のあなたの幸福度	59.9%	62.9%	3.0
3. 現在の日常生活に不安や心配事がない	43.4%	57.3%	13.9
協働性に関わるウェルビーング	82.5%	88.1%	5.6

4. この学校に入ってよかったと思う	88.8%	90.9%	2.1
5. 学校の一員だと感じている	84.9%	93.0%	8.1
6. 大切な人を幸せにしたり、楽しませたりしていると思う	73.7%	80.4%	6.7
探究性に関わるウェルビーング	72.4%	79.7%	7.3
7. 自分の将来について明るい希望を持っている	69.7%	76.9%	7.2
8. 自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたい）を持っている	73.7%	80.4%	6.7
9. 自分の将来に向けて大切だと思うことを実行している	73.7%	81.8%	8.1
社会性に関わるウェルビーング	55.3%	56.8%	1.5
10. 将来、自分の住んでいる地域のために役立ちたいという気持ちがある	67.8%	69.2%	1.4
11. 住んでいる地域の文化や暮らしの価値ある部分を、自らの手で未来に伝えていきたい	55.3%	59.4%	4.1
12. この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる	55.3%	58.0%	2.7
13. 日本の将来は明るいと思う	42.8%	40.6%	-2.2

◆考察

全体の項目の中で、主体性に関わるウェルビーング「3. 現在の日常生活に不安や心配事がない」の項目に高い上昇がみられた。探究活動等を通して、地域の課題に向き合うことや、チャレンジしている身近な大人に出会うことを通して、生徒が自分自身を振り返り、自己内省を深めていったことが数値に影響しているのではないかと推測する。

また、探究性に関わるウェルビーング「9. 自分の将来に向けて大切だと思うことを実行している」の項目の上昇については、３年生は進路実現に向けた探究活動の取組が影響していると考える。理想と現実のギャップを認識し、今自分が身に付けなければならない力は何かについて考え、進路実現のために困難なことがあっても乗り越えようとしたりする経験の影響があるのではないかと推測する。１，２年生については、地域の課題や学校外の方々と多く関わる中で、自分たちが今学んでいることは、自分自身のためであると同時に、地域のため、社会のためであると認識する機会が多くあったことが起因しているのではないかと考える。

今回、１回目の結果をもとに、教職員全員で分析を行った。その分析をもとに、振り返りを行い、それぞれが教育活動に活かしていったことも成果の大きな一因である。

（２）ルーブリックを活用した評価について

校内での探究活動の評価はルーブリックを活用して行っている。評価表を作成するにあたり、大槌高校魅力化構想骨子において策定した人物像の柱「自立・協働・創造」をベースにして総合的な学習の時間（三陸みらい探究）で育てたい資質・能力を６つ設定した。その上で、６つの資質・能力に関する具体的な評価項目を単元別に作成し、評価を行っている。

学習指導要領解説において示される「生徒に個人として育まれる良い点や進捗の状況などを積極的に評価することや、それを通して生徒自身も自分の良い点や進捗の状況に気づくようにすることも大切である」という指針に則り、項目別の段階評価にあわせ、文章による評価も生徒に知らせている。

５　大槌高校 総合的探究の時間　ルーブリック評価表

【総合的探究の時間で育成する資質・能力の設定】
・「大槌高校魅力化構想骨子」にて設定した目指す人物像をもとに、総合的探究の時間で育成する資質・能力を６つに細分化した。
・それぞれの資質・能力を３段階でレベル分けし、それぞれ１～３学年終了時の目標状態として記述語を設定した。
・それぞれの記述語について、評価項目の観点を２つずつ設定した。

育てたい人物像	資質・能力		内容	レベル１（１学年終了時の目標状態）		レベル２（２学年終了時の目標状態）		レベル３（３学年終了時の目標状態）	
				高校生としての自覚		社会の一員としての自信			
				記述語	評価項目の観点	記述語	評価項目の観点	記述語	評価項目の観点
自立（意志がある）	1	**ジブンゴト**	三陸地域の復興や自身の未来に向けた前向きな意志	三陸地域の復興や身の回りの出来事を自分に関係のあることと考え、自分の意見を持つことができる。	①自分や地域の理想像について、具体的な考えを述べることができる。 ②活動を人任せにせず、みずからすすんで取り組むことができる。	社会や未来を良くしようとする意欲を持ち、志を自信をもって語ることができる。	①自分が関心を持ったテーマについて、自信を持って語ることができる。 ②自分が関心をもったテーマに取り組む意義を説明することができる。	社会の一員として自覚をもち、よりよい未来にしようとする意志を持てる。	①関心領域を通じて、社会にどんな貢献をしたいか説明することができる。 ②自分の強み（大槌）を活かして社会にどんな貢献をしたいかを語ることができる。
	2	**課題設定力**	課題解決や自己実現のために、取り組むべき課題を明らかにする力	理想の姿と現状のギャップから問題を見つけ、取り組むべき課題を考えることができる。	①「理想の姿」と「現状」を考えて、解決したい課題を挙げることができる。 ②課題が生じる原因を論理的に考えることができる。	解決策の実行を繰り返しながら、より重要な新しい課題を設定することができる。	①実行したことを振り返り、次に取り組む課題を設定することができる。 ②課題の設定と解決に向けたアクションを繰り返しながら仮説を深めることができる。	課題に対する関心や周辺知識への理解を深め、熱意をもって取り組みたいテーマを見つけられる。	①関心領域について、解決されるべき課題を説明することができる。 ②卒業後に取り組みたいテーマを自分なりに考え、自信を持って語ることができる。
協働（仲間とともにある）	3	**共感・相互理解**	価値観や意見の違いをみとめ、前向きに受け容れる力	自分と異なる他者の意見や価値観を尊重し、受け入れることができる。	①相手に安心感を与える聞き方をすることができる。 ②相手の考えの背景を想像することができる。	対立する意見や価値観を取り入れ、その背景を想像することができる。	①他者のテーマに関心を持ち、学び合う雰囲気づくりに貢献することができる。 ②立場や考えが違う人にとってもプラスになるようなアイデアを出すことができる。	価値観の違いをふまえ、身の回りの他者や社会全体がよりよくなるための考えを持つことができる。	①多様な関心領域を持つ仲間と共に学び合う環境づくりに貢献できる。 ②対話を通して、他者の強みを見つけることに貢献できる。
	4	**One Team**	自分の意志をよりよく伝えながら、多様な人を巻き込む力	自分の考えをはっきりと伝え、所属する集団の中で協力して活動することができる。	①他のメンバーの活動に関心を持ち、手伝ったり質問したりすることができる。 ②視線を相手の方へ向け、聞き取りやすい声で話すことができる。	自分の意見や考えをわかりやすく発信し、身近な他者を巻き込んで活動することができる。	①周囲や外部の協力を得て活動を行うことができる。 ②全体の流れをストーリーにして、相手に伝わるよう熱心に語ることができる。	自分の考えを論理性と熱意をもって伝え、多様な立場の人の中で活動することができる。	①自分の考えを伝えながら、多様な立場の人と議論することができる。 ②自分の考えを熱意をもって論理的に説明することができる。
創造（逆境から創り出す）	5	**レジリエンス**	困難な状況をプラスに考え、前向きに挑戦し続ける力	与えられた環境の中で、ひるまず前向きに物事に挑戦することができる。	①自分の考えをあきらめずに言葉することができる。 ②過去の出来事や体験とつなげて自分の考えを持つことができる。	全く新しい環境や、思い通りにいかない状況でも、物事に前向きに挑戦することができる。	①物事が思い通りに進まないとき、打開策を考えて実行できる ②新しい環境にみずから飛び込んでいくことができる。	困難な体験もプラスに捉え、未知の環境へ飛び込むことを楽しむことができる。	①関心領域の専門家や職業のプロに自らアプローチしていくことができる。 ②今までの経験と自分の強み（大槌）との関連を具体的に話すことができる。
	6	**価値創造**	新しい視点やアイデアをつくりだし、課題解決に活かす力	すでにある事例を参考にしながら、課題の解決策を考えることができる。	①オリジナリティのある解決策を考えることができる。 ②解決策の効果について具体的に説明することができる。	集めた情報を活用して、自分なりの新しい視点やアイデアを持つことができる。	①自分なりの視点で解決策を考えることができる。 ②取り組みを振り返り、学びや発見を自分の言葉で表現することができる	既存の枠組みにとらわれず考え、誰かの役に立つ知見を発信することができる。	①関心領域の未来を見据え、理想の姿を自分なりの言葉で説明することができる ②他者にとって役立つ知見を、オリジナリティのある言葉で語ることができる。

Ⅲ　参　考　資　料

◇目標設定シート

◇魅力化評価システムによる評価結果

◇令和７年度入学生の在学期間の教育課程

【実施計画書（普通科改革支援事業）別添2】

ふりがな	いわてけんりつおおつちこうとうがっこう
学校名	岩手県立大槌高等学校

新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）
目標設定シート

本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	目標値（　年度）
a	（成果目標） 魅力化評価システムによる調査より本校の育成したい資質能力に合致する9項目を抜粋し平均値化したものに対する肯定的解答の割合						単位：
	本事業対象生徒：			69%	72%	73%	卒業時80%
	本事業対象生徒以外：		72%				
	目標設定の考え方：主体性、協働性、探究性、社会性に関わる学習が幅広く行われているかを見る。						
b	（成果目標） 魅力化評価システムによる調査において「生徒の行動実績」の平均値の肯定的解答の割合						単位：
	本事業対象生徒：			58%	60%	62%	卒業時70%
	本事業対象生徒以外：		62%				
	目標設定の考え方：生徒が高校生活の中で資質・能力をどの程度発揮できているかを見る。						
c	（成果目標） 地域探究科への入学人数						単位：
	本事業対象生徒：			60人	62人	61人	R6　61人
	本事業対象生徒以外：	53人	61人				
	目標設定の考え方：地域探究科への入学人数は実合格人数を見る。						

＜調査の概要について＞

1．生徒を対象とした調査について

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
全校生徒数（人）			167	177	181
本事業対象生徒数			167	177	181
本事業対象外生徒数			0	0	0

◇魅力化評価システムによる評価結果

岩手県立大槌高等学校 2024年度 今回の結果（まとめ）※ 1回目調査のみ

結果の読み取り方

このポートフォリオでは、以下の5側面、4領域、3軸により、高校と地域の学びの「今」と「変化」を読み取ることができます。

5つの側面を
=> 各校・地域の状態を、「①学習活動」「②学習環境」「③生徒の自己能力認識」「④生徒の行動実績」「⑤ウェルビーイング」の5つから把握しています。

4つの領域から
=>各設問を「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4つの資質・能力に関する領域に分類しています。

3つの軸で
=>上記のデータを「時間軸(前年度からの伸び)」「属性軸(学年・学科等による違い)」「地域軸(他地域との比較)」の3つの軸で把握可能です。

結果に出てくる数字や言葉は次の意味を表しています。

【肯定的回答割合(%)】
各項目で「4.あてはまる／よくする」「3.どちらかといえばあてはまる／ときどきする」という肯定的回答をした割合
※ 0～10の11段階で回答する「幸福度」「生活満足度」のみ、6以上の回答割合を肯定的回答割合としています。

【他地域】
同じ機会に調査を実施した、「同都道府県」「全国」の回答の平均値
※ 年度中の値は随時変動する点にご注意ください

1.総括表

5つの側面について、領域別に肯定的回答割合を示しています。

	主体性	協働性	探究性	社会性
①学習活動	65.8%	77.5%	71.7%	61.0%
②学習環境	85.8%	78.6%	80.4%	75.1%
③自己認識	63.0%	72.6%	65.0%	60.4%
④行動実績	68.4%	68.1%	57.6%	53.5%
⑤ウェルビーイング	54.6%	82.5%	72.4%	55.3%

2.強み・伸びしろ

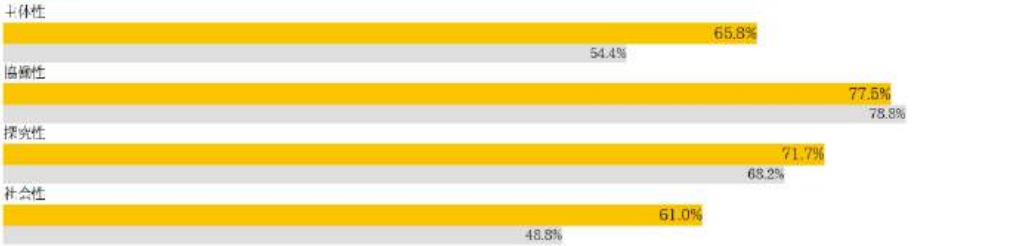
各側面に含まれる指標のうち、もっとも肯定的回答割合が高い指標（強み）ともっとも肯定的回答割合が低い指標（伸びしろ）を示しています。
※肯定的回答率が同じ複数の指標がある場合、設問番号が最も小さいものが表示されます。結果の詳細は「レポート（生徒）」にてご確認下さい。

	強み		伸びしろ	
①学習活動	8.活動、学習内容について生徒同士で話し合う	84.9%	16.日本や世界の課題の解決方法について考える	48.0%
②学習環境	26.自分が何かに挑戦しようと思ったとき、周りは手を差し伸べてくれる	88.8%	34.地域に、尊敬している・憧れている大人がいる	60.5%
③自己認識	43.自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	90.8%	41.複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ	42.8%
④行動実績	71.授業で分からないことについて、自分から質問したり、分かる人に聞きにいったりした	74.3%	70.地域社会などでボランティア活動に参加した	46.1%
⑤ウェルビーイング	66.この学校に入ってよかったと思う	88.8%	89.日本の将来は明るいと思う	42.8%

3.前回結果との比較

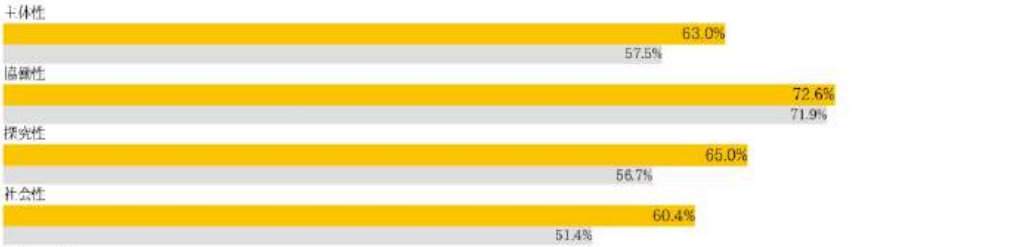
棒グラフ（黄色）が今年度の全校の結果、棒グラフ（グレー）が前年度の全校の結果を示しています。

①学習活動

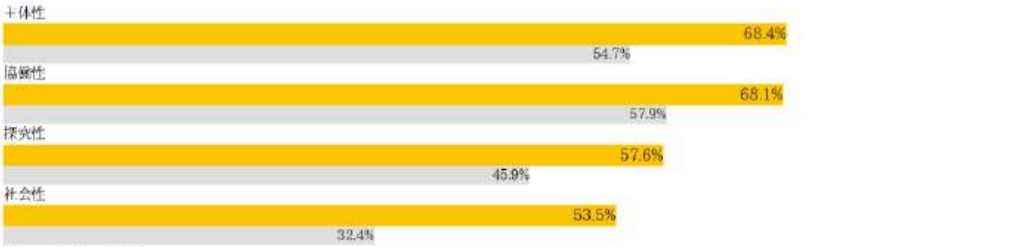


②学習環境

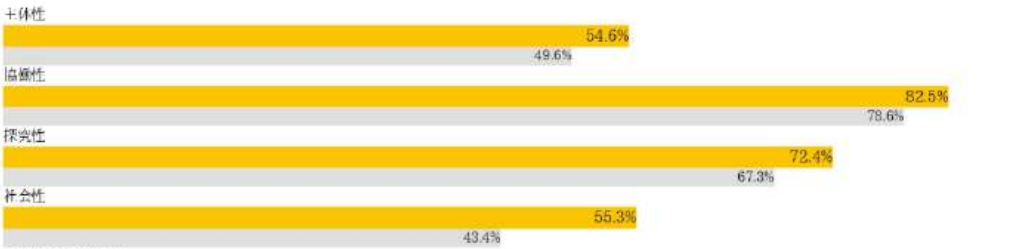
③自己認識



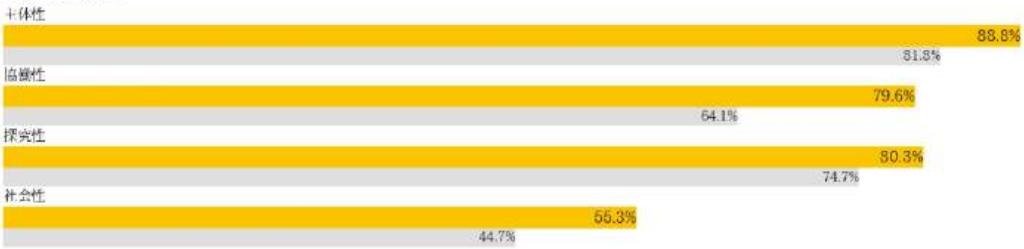
④行動実績



⑤ウェルビーイング



⑥総合的な満足度



R6年度入学生の在学期間（3年間　2024～2026）の教育課程

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1学年［R6:2024］		現代の国語		言語文化		歴史総合		数学Ⅰ			数学A 個別最適数学α		科人		体育		保健	家庭基礎		情報Ⅰ		英コミⅠ			論・表Ⅰ（英語） 個別最適英語α		音美書Ⅰ		総探		LHR

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
2学年［R7：2025］	理系（物）	公共		地理総合		化学基礎		保健	体育		論理国語		論・表Ⅱ（英語）		物理基礎 生物基礎		数学Ⅱ				英コミⅡ				数学B		古典探究 音美書Ⅱ		総探		LHR
	理系（生）																														
	文系（日）														ひょっこり（国語）										日本史探究 （世界史探究）						
	文系（世）																														
	医療系														生物基礎										数学B						
	専門・公	公共		地理総合		化学基礎		保健			論理国語		ﾌｰﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ		ひょっこり		保健プラス		Eパス（英語）		簿記		情報処理		個別最適数学β						
	就　職												大槌キャリア・プログラム（OCP）～インターンシップ～						個別最適英語β												

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
3学年［R8：2026］	理系（物）	体育			数学Ⅲ			数学C			論理国語		英コミⅡ			物理				化学				Oラボα（理科）		論・表Ⅱ（英語）		古典探究 音美書Ⅲ		総探	LHR
	理系（生）															生物															
	文系（日）				数学探究α			国語探究α								日本史探究 （世界史探究）				（倫理） 政治経済		くらしmath（数学）			まちづくり探究（社会）						
	文系（世）																														
	医療系				数学探究β											理科探究															
	専門・公				Oラボβ（理科）			個別最適数学γ			論理国語		総合実践			ビジネス基礎		保育基礎 個別最適英語γ		（倫理） 政治経済		ﾌｰﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ		保健プラス		国語探究β						
	就　職																														

文部科学省指定事業

令和６年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業
（普通科改革支援事業）

研究実施報告書　　第３年次

令和６年３月発行

発行者　岩手県立大槌高等学校

〒028-1131　岩手県上閉伊郡大槌町大槌 15-71-1

TEL　0193-42-3025　　FAX　0193-42-4966

学校 HP　　https://www2.iwate-ed.jp/oht-h/

学校 note　　https://oht-hs.note.jp/

印刷所　株式会社　興版社